342
540

郷土研究と讀本の編纂

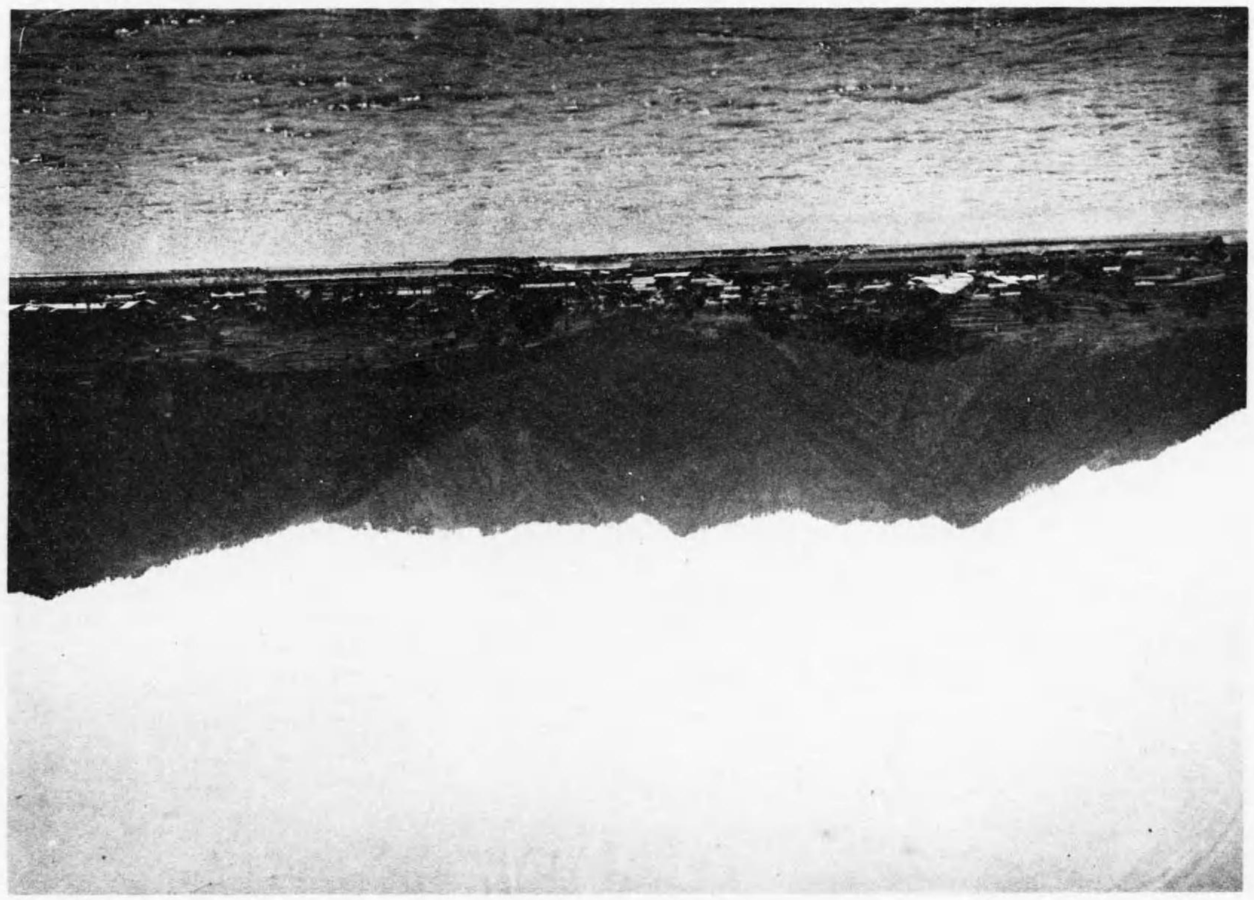
始

特206
2

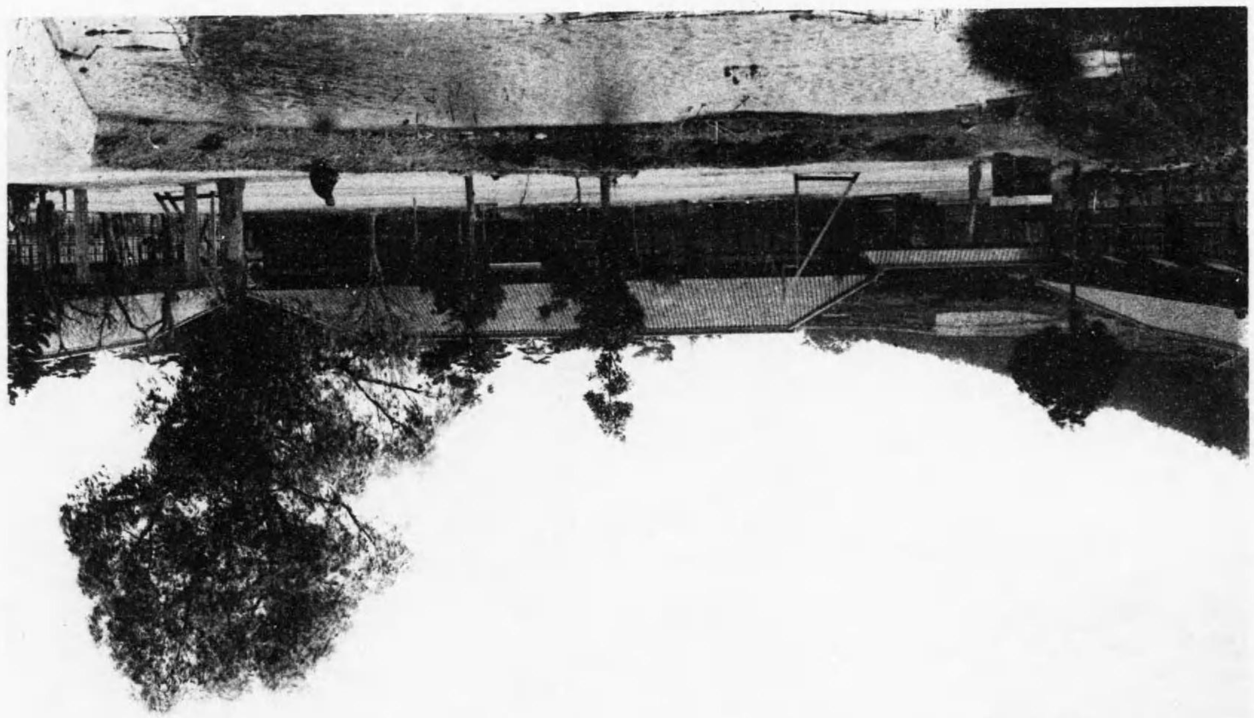
鄉土研究と讀本の編纂

昭和七年五月

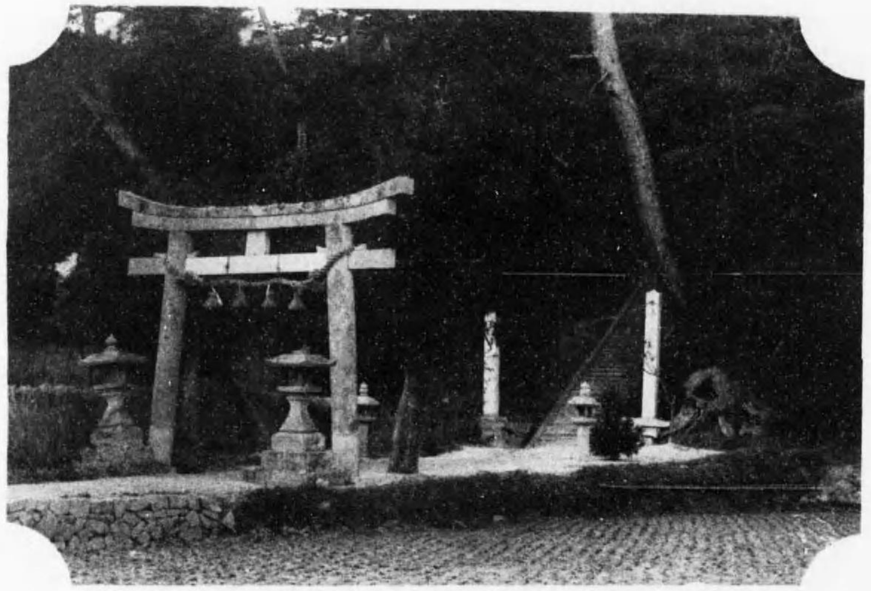
村　た　見　ら　か　山



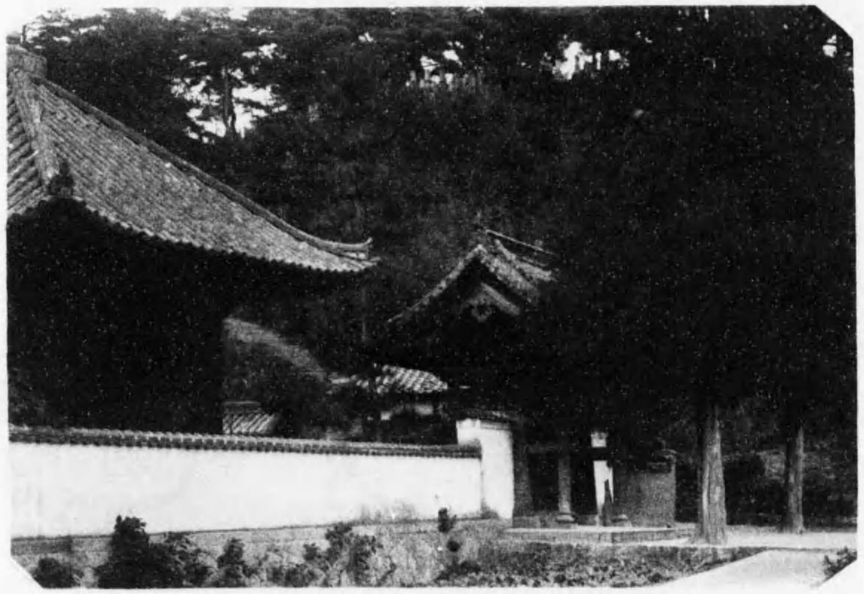
村 に 見 ら か 海



校　舎　の　村

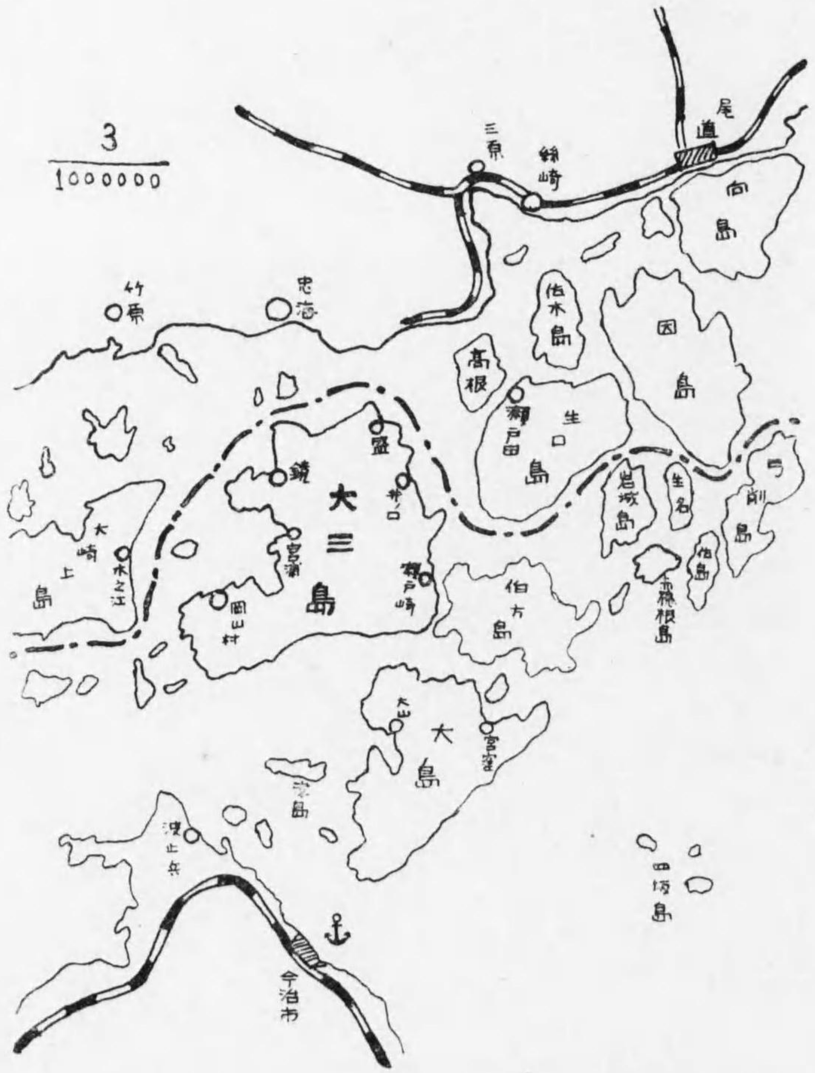


盛八幡神社

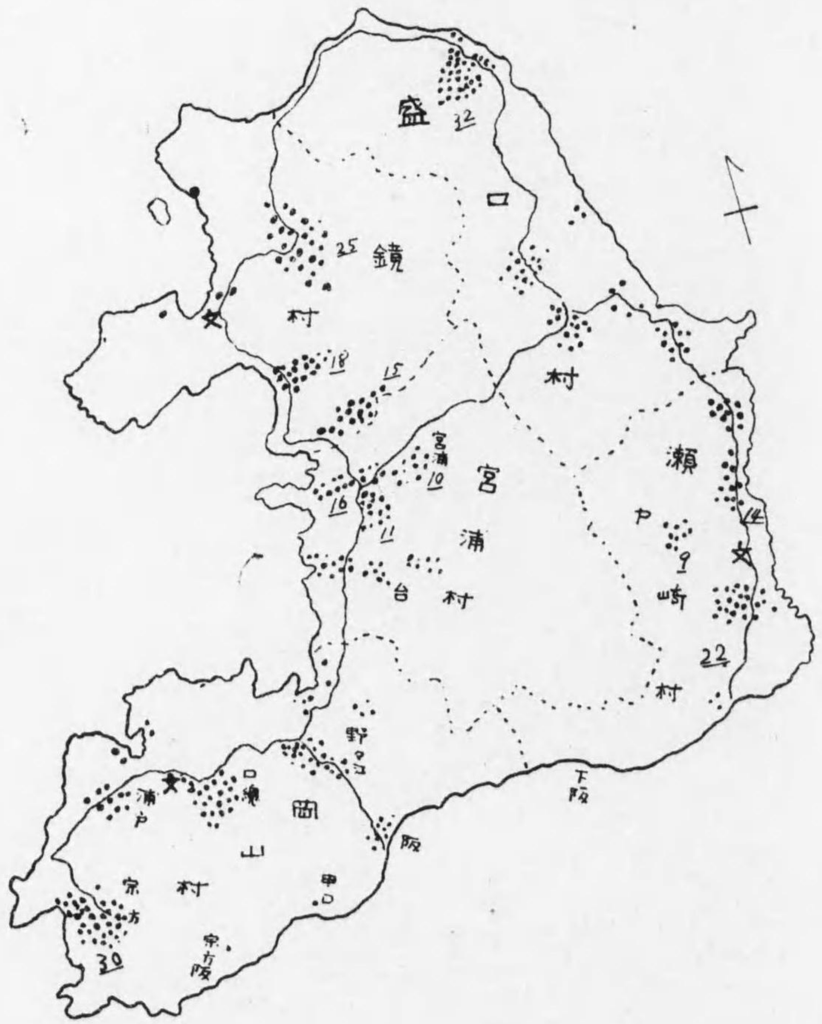


西光寺

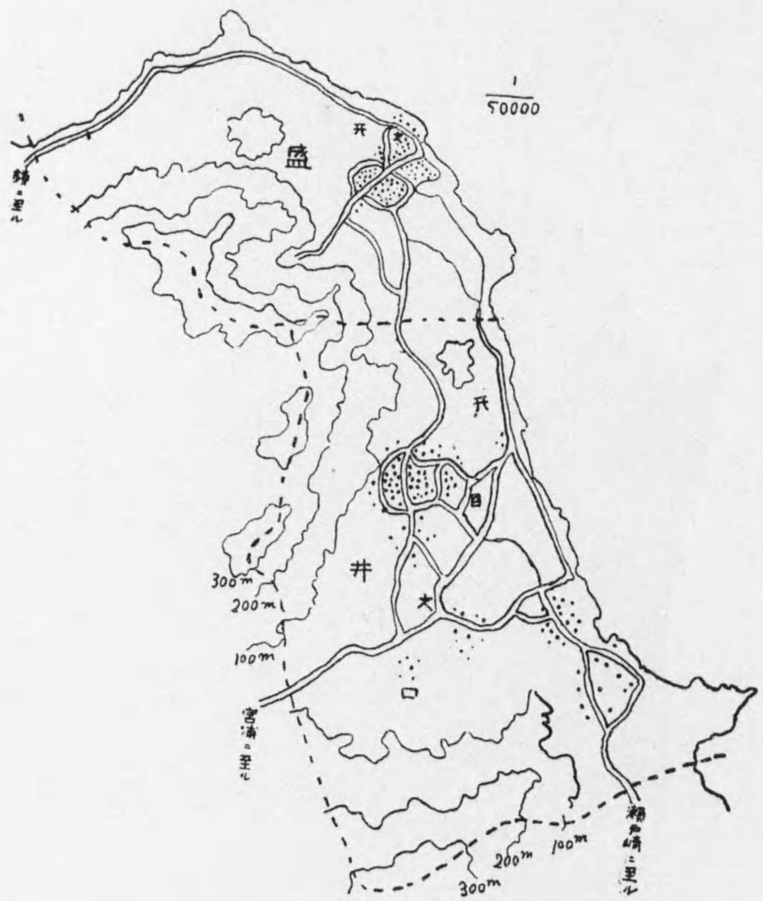
越智郡島嶼部地圖


3
1000000
三原
網崎
尾道
向島
竹原
忠海
佐木島
因島
高根
御戸田
生口島
盛
鏡
大三島
宮浦
御戸崎
岩城島
生名
弓削島
伯島
大崎上島
水之江
岡村
伯方島
大島
宮窪
宗島
波止浜
今治市
日振島

大三島地圖

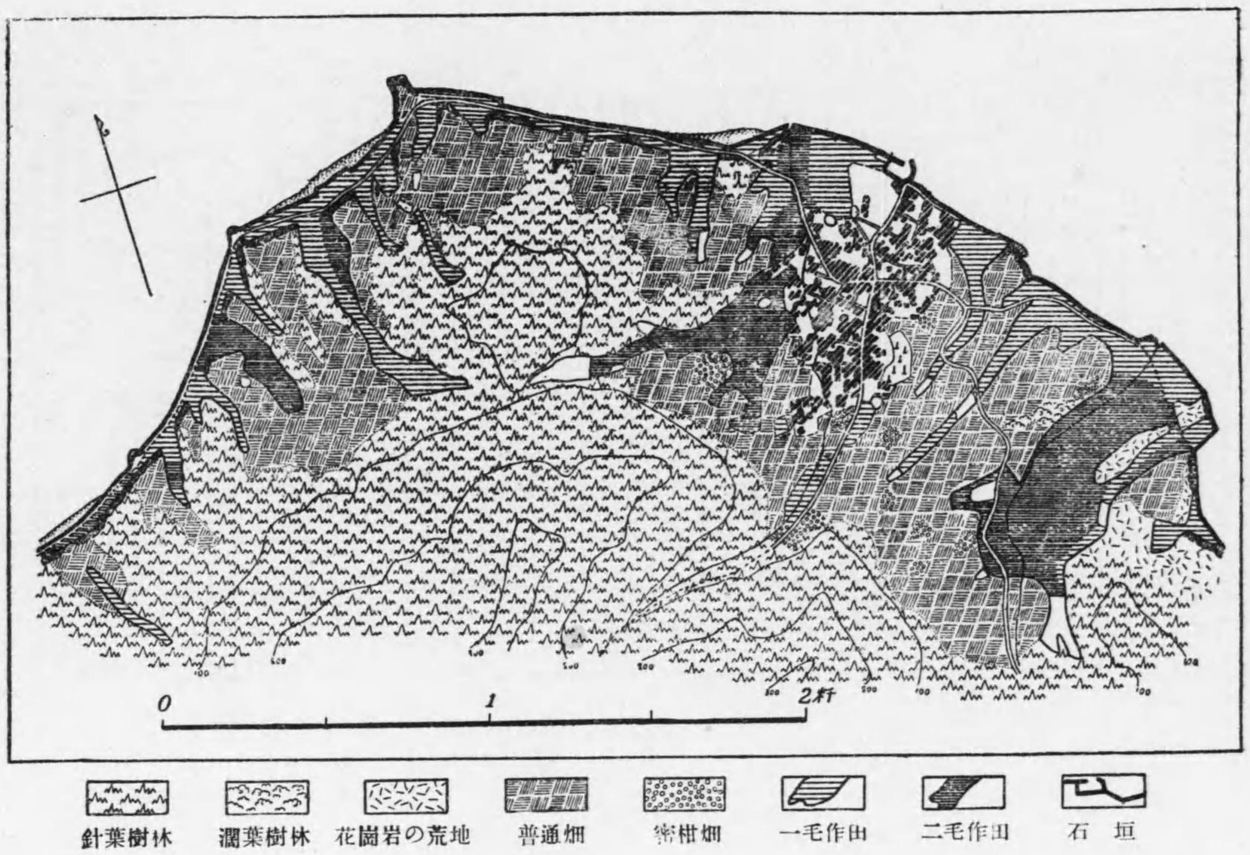


盛口村略圖

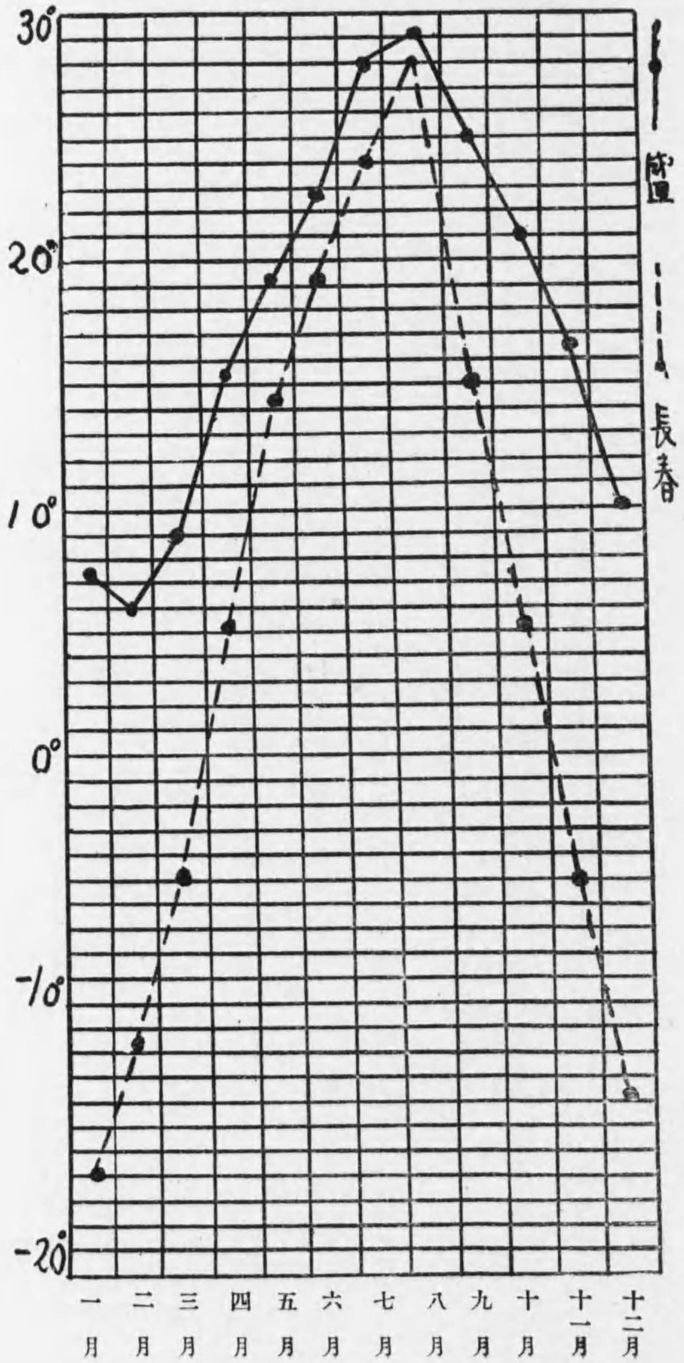


一、百米以上ハ殆ド山林
以下ハ大体耕地
二、・ハ五戸ヲ示ス
三、図 役場
文 学校
開 社

盛耕地分布圖



鄉土と滿洲温度比較圖



342-540

序

昨春松山市で開かれた有志の郷土研究會に臨んだ時に、瀬戸内の島々におもしろい村はないかと縣廳の林視學官や二神縣視學に尋ね、大三島の盛口村の盛部落には古い土地制度が殘つてゐるし、部落も村と思はぬ程密集狀態をなしてゐるから一度見られたらどうかと聞いて、子供の時から名だけ聞いて床しいと思つてゐた大山祇神社に參詣した序に盛部落を見ることにし、總て縣學務部の好意によつて三月十一日の朝今治から乘船して宮浦に着き、盛口村の森校長と中村校長とに導かれて先づ大山祇神社に參詣し、其の由緣や寶物館などを見聞しては中世以來の郷土的色彩の特色を滿喫し、それから集約な土地利用を觀察しつゝ盛部落を訪れたのであつた。

其夜は此部落での物持池田氏の御宅で總代國政儀一氏などから色々盛部落の

話を聞いたり、翌日は半日部落の密集してゐる實情を觀察したりまた附近の村の小學校の先生達に鄕土教育に就いての愚見を述ぶる機を得たのであつたが、盛部落の狀態の研究は、單に同部落の鄕土教育の基底として必要であるばかりでなく、島國としての日本の集村狀態を明かにする上によい型であると思つた。故に自分は東京に歸つてから、内務省社會局の農村住宅調査項目や又衛生局の農村保健調査項目を送つて、科學的認識の上から盛部落が其の生活改善の首途に上る事を森校長におすゝめしたのであつた。

其後森校長はじめ職員各位の勉强は、鄕土讀本となつてあらはれるほどになつたが、自分としては、盛部落將來の爲には其保健の改善を目的とする科學的認識が最も重要性を有つてゐると今でも信じてゐる。

願くは再び盛部落を訪れるまでには、村人の多くは盛部落の密集狀態が如何なる傳統から生れ、それが如何に部落生活の現狀に影響してゐるかを認識し、其將來の生活をよりよくする事に精進する事に協力するやうになつてゐることを祈つて已まない。

かくして盛部落の將來への動きは、瀨戸内海に於ける密集部落の運命の開拓に大きな光を投げ與へ得るに至るであらう。

昭和七年三月六日

文部省囑託　小田内通敏

自序

地域的に隔絶した別天地盛では、現代の社會的惡影響から免れて亂されない平和な生活はしてゐるが、一方鄉土の眞相を知らないことから村人達の生活にかなりの矛盾と行詰があります。かゝる鄉土の將來を背負つて立つ兒童の教育は、たゞ汗を流せとか、勞働は尊しなどと漠然と叫んではゐられない。總ては鄉土に立脚してよりよき鄉土の建設に向つて邁進する人間の陶冶でなくてはならないことを痛感致します。それには教育者自らが先づ鄉土を正しく認識しなければならない。私共の鄉土研究はこゝを基調としてゐます。

昭和四年の秋は小さい研究を土台に、鄉土展覽會を開き相當の効果を收めました。これに力を得て研究は次第に進められましたが、進むに連れ何だか物足りなさを感ぜられてなりませんでした。處へ昨年三月鄉土研究の權威、小田内通敏先生を御迎へして、御批評を願ひ更に將來の研究につき數々の御指導を賜はり光明をえた事を喜びました。八月には綿貫勇彦先生の實地踏査御指導に預り、此の間林視學官二神丸岡視學等諸先生の御援助により研究は益々進展しました。

私共はこれ等の研究を基礎に實際教育への第一歩鄉土讀本の編纂を致しました。一同はこの研究と編輯會議によつて鄉土の生命に觸れ之を熱愛し更に鄉土の再建設を念願するに至りました。こゝに於て日頃私共の願つてゐる眞實の教育は第一歩へ入つたことを深く信じてゐます。

私共が實際にも學理にも未熟な者の集りでありながら正しき鄉土認識の材を生み得たことは、全く諸先生の御指導と御援助の賜であると深く感謝してゐます。

盛鄉土讀本上中下へ私共の願ふ教育と讀本編纂の主意を加へて出版したのが「鄉土研究と讀本の編纂」であります。廣く御批評を仰ぎ鄉土盛教育に精進したいと思ひます。

終りに校正の勞をこられた今治實科高等女學校玉井武夫先生に感謝致します。

昭和七年三月十八日

森繁光
西原繁松
先田菊次郎
神原賢
森壽譽
三好貞見
山田津也子
先田政子

鄉土研究と讀本の編纂

一、鄉土教育の使命
　一、鄉土教育への反省
　二、鄉土教育の意義
二、鄉土研究の教育的意義
　一、教師先づ鄉土を認識せよ
　二、教育基調としての鄉土研究
　三、鄉土研究の實際
　四、調査要項
三、鄉土讀本の編纂
　一、編纂の趣旨
　二、編纂の實際
　三、編輯會議
　四、使用の態度

一、鄉土教育の使命

一、鄉土教育への反省

鄉土教育の思潮が現代の初等教育を押し流してゐるのではないかとまで考へられる。各地に於てはしきりに鄉土教育研究大會が開かれ全國的にも昨年十一月十四日から三日間廣島高師に於てその協議會が開かれ、十二月廿六、七の二日間鄉土教育聯盟主催のもとに東京に於て斯道の權威とも言ふべき學者、或は實際家を集めて研究會を開いてゐる。かうして叫ばれてゐる教育思潮に對して地方一般の實際家が如何なる態度をとり或は施設經營をしてゐるかを靜思した時私共は心淋しく感ぜられるのである。大体に於て二つの傾向を持つてゐると思はれる。即ちこれを全く一時的流行の際物であると冷笑し去る者と、反動的に何でもかでも鄉土的研究をすればこれが即ち鄉土教育である如く考へてゐる者とがある樣に見受けられる。

前者は鄉土教育に對する認識の不足と言ふよりも寧ろ自己が之に對して思念せざる淋しさを醫せんとする一種の自己慰安である。凡そ如何なる思潮であつてもそれが存在を認められる事は其の必要に迫られ或は從來の考へ方に欠陷のある事を立證されてゐる譯である。或る實業界の有力な地位にある人が「小學校の教員程偏狹な排他的な一人よがりなものはない。」と言はれたのを聞いた事がある。小學校教員である私共は實に不快であつた。けれども大いに反省しなければならぬ事である。消化力のない悲哀から出た自己滿足的な批難攻擊冷笑は一顧の價値もないが後者に至つては其の意氣甚だよしとするも未だ認識不足の謗は免れ得ない。

鄉土教育は鄉土研究の基礎の上に建設せられなければならない。故に鄉土教育を思念するものは先づ鄉土の研究をしなければならぬ。

然し鄉土の事象を手當り次第に研究すればよいと言ふ樣なものでもない。鄉土の生命的發展進化に餘り關係のない些細なこ

この研究や保存に力を入れて輕薄に考古學者や土俗學者の提燈持をしてはならない。一局部に專門的に深入りしてそれが即ち鄉土教育であると思ふならば邪道に入る事も亦深いと思ふ。

そこで私共は教育基調としての鄉土研究を提唱するのである。即ち鄉土教育は鄉土研究の上に立たなければならず、鄉土研究は教育の基調としてゞなければならぬ關係にある。こゝにかの鄉土研究即ち鄉土教育など考へる事は最も謹むべき事であると信じてゐる。

何れの思潮に對しても常に敍上二つの傾向を持つことは普通のことであるが私共は一歩退いて鄉土教育とは何ぞやと靜思しなければならぬ。

二、鄉土教育の意義

教育の理念。

教育が主知的であり、概念的であり、巧利的であつて人間の陶冶に留意を欠いでゐた事は久しいものであつた。それは明治の教育が科學万能であつて、職業への單なる過程であつたからである。

それが國民教育にまで及んで小學校の教育は中等學校への入學準備となり、それ等準備の競爭を事として國民的な品性の陶冶を缺いでゐた事は甚だ遺憾である。然しそれも西洋の文化を輸入するに急なる時代としては又已むを得ぬ事情であつた。教育が職業への單なる道程であり、必要條件であつたため、總てが準備的であり、形骸的な一片の卒業證書が物質的生活に有利なる地位を必然的に與へた事は、少からず教育を墮落せしめた。それが近來の經濟界の不振と國民思想の展開によつて高等教育を受けた特權階級に就職難の痛棒を見舞はし、更に就職者へは生活難の鐵槌を下して彼等に反省を促してゐる。此の現象は國民に向つて教育とは何かと反問してゐる。そして自己の眞實性を呼び起して人間本來の面目に生活せしめんとする教育の本質的な叫を聞く樣になつた。

時代は流れて徒なる西洋模倣は夢と過ぎ去つて歐米の文化は充分に消化され、東西文化の融合は燦然たる日本文化を建設して不斷の進展をなしてゐる。余土校は其著『鄉土教育の理論と實際』の卷頭に於て『眞實の教育を求むる者は、飜譯的理論と模倣と、流行との波間に何時までも漂泊の楫を繰りつゝ放浪の旅を續けることを止めて、先づ自己の根據としての港を求め、そこを中心として徐ろに發展を計らなくてはならぬ』と言つてゐる。新渡戸博士は『創價教育學体係』に序して『現代教育の禍根は遠く明治維新の初め建設則に當つて、西洋の教育を換骨脫胎して適用せる模倣教育に胚胎してゐると思ふ。……現代社會のもつ缺陷が此の教育によつて釀成されつゝあつた事は何人も否む事は出來ない事實である。』と述べられてゐる。

私共はもう準備的、飜譯的、模倣的教育をはなれて眞實な教育の目的觀の再建設をなし教育の本質に行じ以つて健全なる社會の樹立に備へて罪亡しをしなければならぬ時代になつてゐる事を悟らねばならぬ。

教育の本質とは何か。

教育は教育する人と、教育される人との二元的對立的に考ふべきものではない。教育する事は同時は教育さるゝ事であらねばならぬ。勿論教育的体驗に於てはこの主体と客体とを必要とするものである。けれども此の二元は同時に一元である融合の境地に至らねばならぬ。汝はかくすべし、かくあるべし、ではなくて私共はお互にかくあらねばならぬ、かくなさねばならぬと言ふ兩者融合一如の本に行ずる事に於てのみ教育的体驗は構成されるのである。即ち教育する人に教育される人の人格を價値的に向上させたいと言ふ純眞な強い教育的思慕がなくてはならぬと同時に、教育される人に之に應ずるだけの內的躍動があつて、其の人格と人格が接觸交流することによつて、理念への思慕は歩一歩と深められて行くのである。然し人格の接觸は絶えざる自己の究明がなくては出來ない。それは自己の發展なきものは理念への歩があり得ないからである。

教育する人が專念自己を究明することによつて其個性は發揮せられ、我れ自らを常に反省自覺することによつて、教育される人の生活內容に喰ひ入る事が出來るのである。

即ち教育する人の內面に躍動が起つてゐないならば知識は授け知らしめることは出來ても品性の陶冶には何等の價値を持た

ないのである。

郷土教育の本質。

郷土教育に關する出版物は實に多い樣であるがこれ等を通して見る時何れの學者も論者も大体郷土教育の意義目的に關して次の二つは之を肯定してゐると思ふ。

郷土による教育、即ち郷土に立脚した教育として之を方法原理の上に認めてゐること。次は郷土への教育、即ち郷土其のものを認識せしめて理念としての郷土の再建設に至らしめんとする目的原理の上に立たんとするもの。

私共もこの二つの原理の上に立つべきものである事は信じてゐるのであるが、之を肯定するに至る背景としての教育信念を明確にしなければならない。

現代に於ては國際協調とか世界人類愛とか言ふ流れが渦まいてゐるが、それは科學の發達と文明の進歩によつて年と共に世界の距離を益々短縮し人種を超越して接近相和するの要を痛感してゐるからである。そして諸般の文化は協力協調の下に日々其進展を續けてゐる。國際協調の實をあげ、世界の平和を保持して行くには國力の充實をはかることである。けれども國力の充實をはかることは決して他を排したり壓迫したりする事ではない。而して平和なる國力の充實は民族主義によるべきであると思ふ。それは民族理想の實現が健全なる國家を構成するからである。其の民族理想の根底をなすものは郷土愛である。佐藤教授は「郷土教育は野生の郷土愛に其の深さと幅を加へるものである。」と言はれてゐる通り野生の郷土愛は偏狭であつたり頑固であることを免れないかも知れぬ。正しき郷土愛は如何にして啓培されるか。それは我自らを正しく識ることである。

我自らが空間的に社會現象と自然環境の上に立つて、其の姿及相互の關係を相觀ると同時に時間的に我等の祖先が郷土に生活した文化的進展を眺める姿、それが我自らを識る所以である。我等の祖先はこの環境に立つて如何に活動し郷土社會に貢献せしかを知ることによつて、我等は現在如何にあるべきか、更に我等の生活が將來に如何なる影響を持つべきかを思念せしめ一歩々々と掘り下げられて眞實の自己へ到達せんとするのではないか。

最近の教育思潮は兒童の内部から其人格を開發させるといふ事を重んじてゐる。それが即ち生活教育、体驗教育、或は勞作教育として叫ばれてゐるのではないか。私共が前に述べた教育理念としての被教育者の教育的思慕を躍動せしめんとする態度もこれに外ならぬのである。兒童自らの人格を内部から向上させて行くことは自己を省みることである。それには自己の体驗の世界たる郷土を正しく認識せしめることであると信じてゐる。郷土体認による自己の發展、その上に築かれたる郷土愛は決して偏狭ではあり得ない。狭い郷土愛は自己に歸つてゐないからである。故に「郷土への教育」としての教育によつて郷土を体認し郷土意義を明確ならしめ郷土愛を啓培することも結局は眞實なる自己に歸らしめんがためである。その眞實なる自己の展開と郷土愛の啓培は二元的のものではなく、又その一を得て然る後他に到達するが如きものではなくて、實に其の二者の相持して流れ行く所に其の深さと幅とを增して行くものではあるまいか。この合流する融合体が國家愛であり、やがては世界人類愛ともなり得るのである。即ち個に徹する事によりて普遍へ參ることが出來るのである。

郷土による教育を是認することも教材を徹底せしめる事によつて教育的思慕を高め内的躍動を起さしめんとする事である。かくして二つの原理の上に立つ郷土教育もこの兒童の内部から人格を開發させると言ふ新思潮を背景とし教育の理念の根底の上に眞の使命を果すことが出來るのである。故に郷土教育は新しい教育であるとも言ひ得るのである。

方法論の上に立つ郷土教育に對する非難の第一は、現在の教科書でさへ教へきれないのに其の上郷土の事象を授けることは兒童にとつて餘り重荷過ぎると言ふのである。若し徒に郷土事物を調査せしめたり、郷土的材料を附加して記憶を強ひる樣な事をすればそれは私共の叫ばんとする郷土教育と餘りに距りがある。

郷土に立脚したる方法的原理を是認することは、体驗の世界である郷土によつて其の教材の徹底をはからんとするものである。例へば滿洲事變以來滿洲に於ける寒氣がよく問題となるのであるが、零下十度とか二十度と言ふ樣な事はたゞ大變寒いと言ふ事よりも數的に餘程具体化されてゐる樣に思つて兒童に講話してもそれだけでは兒童には徹底しない。氣温が零下に降る事の稀な私共の郷土に於てはとても想像の及ばない事である。零下二十度三十度であると言へば誰でもこゝの今日の寒さが何

度位であらうかと心の内に反問せずにはゐないであらう。滿洲に於ては鄉土の眞夏から極寒の二月へ降るだけの溫度が鄉土の極寒から更に降るのだからたまらないとグラフ（下卷附錄參照）でても示すならば單に何度であると言ふよりも理解と想像を容易にすることが出來るのではあるまいか、その時鄉土の溫度の上に立つて兒童に說明することが何でそれが重荷となるのであらうか。更に滿洲に於ける氣溫を地理的敎材として取扱ふ場合雨量をも加へて單に寒暑の差の甚しい事のみに止めずこれ等の現象が產業交通に及ぼせる影響と其の狀態の異なる所を說明するに何の不都合があらうか。直感によれないものを兒童の体驗の世界から出發させることこそ兒童により多き關心を持たせるのではあるまいか。たゞ徒なる鄉土材の附加であつては兒童の負擔を增し理解を困難ならしめる事は固より明かである。

鄉土への敎育に關しての非難の第一は鄉土敎育は狹い愛鄉心に固執して祖國愛を養ふに妨となり、さらぬだに引込思案の國民を一層退嬰的ならしめ國家の發展を願ふ所以でない、と言ふのである。

鄉土敎育も其の粕を嘗めればこの弊に陷る事固より免れ得ない所である。鄉土愛の啓培は自己への掘下げと鄉土を体認せしむることの合流によつて生れ育まれるものである。かくして啓培された愛鄉心は偏狹ではない。

私共は鄉土を体認せしめ愛鄉心を培ふ事によつて鄉土に拘泥しない人間を作ることが鄉土敎育に於ける重要な任務であると信じてゐる。寺院敎會は寺院や敎會の必要のない人間を作ることに於て其の存在に意義があるのである。寺院敎會に拘泥固執する人は既に宗敎の本質から遠ざかつてゐるのではなからうか。

鄉土にのみ拘泥したり、狹い鄉土愛に固執する樣に敎育されるならばそれは既に邪道に陷つてゐるものである。何事によらずそのものゝ中を通ることはよいがそれに拘泥する時は既に鼻持ちのならぬ臭氣を帶びてゐる。鄉土敎育なども餘り鄉土々々と其の名に拘泥する事によつて邪道に陷る事が多いのではないかと思はれる。其の意味に於て私共は鄉土を冠せない樣になつて敎育が其の理想に向つて行せらる時眞實の鄉土敎育が行はれてくるのではあるまいかと思つてゐる。小川敎授は『鄉土敎育』の中にその目的を論じ

『この敎育の目的を事實的、悟性的方面に求めないで、鄉土の歷史的、現實的生活の紹介、並に其の社會の中に兒童を導き入れる事にありとしてゐる。』

と述べられてゐる。深く味はふべき事だと思ふ。

二、鄉土研究の敎育的意義

一、敎師先づ鄉土を認識せよ

村の青年が一日訪ねて來て雜談をしてゐる時机上にあつた一枚の寫眞を見つけて「先生これはお里の村ですか」と言ふから私はどんなに言ふであらうかと思つて「うん、さうだ」と答へた。すると青年は次から次へと、大變家がこみ合つてゐるとか割合藁葺の家が多いとか、大きな寺があるとか話してゐたから私はたゞ「さうださうだ」と答へてゐた。所が不意に「あら、これや、先生盛ぢやないのですか」と言ふから「うん盛だ、何故君はそれに氣付いたか」と言ふと「あの海の向ふの山が高根島に似てゐたのでふと氣付いてみると、どうもあれが西光寺の樣でしたから」「隨分先生も意地が惡い。」と言つて大笑をしたことがある。毎日盛に生活して部分的な鄉土の自然には常に接し其の景觀は毎日見てゐながらしかも全体としての盛の景觀は異樣に感ぜられ僅かに全景を海の彼方に見てゐる高根島によつてそれが鄉土ではないかと青年は氣付いたのである。高根島があのゆるやかな線で海の彼方に聳え、夕日に照らされて移り行く色合は何とも言へないやさしい氣持と、如何にも安定した感を與へ自然の雄大さを遺憾なく表現してゐるのであつて村人達の腦裡には深く刻み込まれてゐるのである。

丁度自分の顏が見えなかつたり、或は手足は別々のものとしては見ることが出來ても全体としての自己の姿は見得ないのと同樣である。姿そのものを見るには一度鏡の前に立つならば大体に之を見ることは出來るけれども其の姿を單に外形的の姿としてのみ見るならばそれは眞の姿を見てゐないものであつて鏡に反射されてゐる姿は更に鏡の前に立つてゐる生ける自己の内

心にかへらなければ眞實の自己の姿とは言ひ得ないのである。即ち一度鏡の力により反射せしめて之を表し更に再び自己にかへつてみなければならない。

郷土を知ることも同樣である。一度は郷土を離れて郷土を客觀的に觀察しなければならない。郷土を離れる姿が郷土をありのまゝに見る事である。けれども郷土を離れる事は誠に難事である。故に郷土人は眞に郷土を研究する事は出來ないと一方の論者が言つてゐるのは其の邊を物語つてゐるのであらう。卽ち郷土に生活してゐるが故に郷土を知らないのであつてそれは先の青年が郷土の景觀を知らなかつたのと同じことである。郷土を寫す鏡としての郷土研究はこゝに起るのである。けれども客觀的に眺めた郷土は恰も鏡に映した光線の反射に過ぎないのと同じでその眞實の生命に接しこれに觸れ得ないものである。即ち郷土人にあらざれば眞の郷土の研究はなし得ないものであると言はれるのは故ある事であつて、生ける郷土の中には如何程綿密に之を客觀的に研究し科學的に考察しても遂に掴み得ない部面を持つてゐるのである。私共はこの『郷土の生命に接せよ郷土は生命体である』と言はれる小田内先生の御指導によつて今迄續けて來た過去二ケ年の郷土研究はこゝに一回轉をして昭和六年一ヶ年の研究は前年と其の趣を異にした成果を得たのであつた。私共は郷土研究を主觀客觀の融合渾一体として主客を超越したる生命の流にまで至らしめなければならないと考へてゐるのである。

禪宗のお師家さんはよく「怒るものそれ何者ぞ」と言はれる。自己を無くして自己を見ること、自己をはなれて自己をみることは自己をなくすることであり、自己をなくする事は萬法に認められる事である、」と道元禪師が言はれてゐる。自己の一切をそのまゝ見る姿が自己を眞實に知ると言ふことではあるまいか。

私共は主觀的に更に客觀的に郷土の研究をなし、しかも主客融合の中に郷土をありのまゝに見ることが出來るのではないかと信じてゐる。郷土をありのまゝに見ることは郷土の事象を何の選別もなく手當り次第に研究することでもなく、又客觀的にのみ考察したり、或は主觀の中に立てこもつたりするものとは考へてゐないのである。

郷土研究はお國自慢であるといふ事はよく言はれるがこれは全く郷土研究の認識不足と言ふべきであらう。郷土の一切相の中には自慢すべき部面の多分を有するかも知れないけれども、それ故に郷土研究は郷土禮讃であるなどとは考ふべきものでもなく、又郷土の欠点短所を擧げたからそれが郷土の排擊であるなど意味するものではない。それ等諸相を通じて郷土の生命に觸れることが出來るのである。

郷土教育の使命は郷土意識を明かにし、郷土精神を体認せしむるにあると言はれてゐるがその郷土精神を体認することこそ郷土研究の重要なる任務である。

そこで私共は郷土教育を叫び郷土による教育をなし更に郷土再建設にまで至らしめんとするには教師自らよろしく郷土体認をしなければならないことを主張するものである。

たゞ郷土の材料を附加したり、或は單なる郷土化をすることで郷土教育と考へたり滿足したりしてはならないのである。世は擧げて郷土教育を叫び各地に於ては郷土教育研究大會が開かれ氣の早い教育雜誌などの中には既に郷土教育精算號まで出してゐる樣であるが、私共の學校ではひたすら郷土の研究に沒頭してゐたのである。やつと三年間の郷土研究を基礎として郷土讀本を編纂し、眞の教育の第一歩に入らんとしてゐるのである。

教師自ら郷土を正しく認識することによりて、郷土再建設のプランは生れ、其の念願の中に教育さるゝ兒童の心底に郷土思慕の情は高潮せられるのである。我が國に於ては郷土研究は郷土教育の實施に於ける一要素位にしか考へてゐないし、甚しきは郷土研究などよい加減にして置いて郷土教育の聲のみ大に叫んで空騷をしてゐるのではないかとさへ思はれる。英國や獨乙などでは寧ろ郷土調査の方が中心で、學科の綜合とか、郷土化などは第二次的であるとも聞いてゐる。

そこで私共の學校では「先づ教師自ら郷土を認識せよ。」と言ふ事をモットーとして研究を進めて來たのであつた。總ての研究、調査、整理は職員總動員で行ふ事に於て一歩〳〵郷土の認識を明確に導くのである。今回の讀本編纂に當つて數十日間毎日々々休むことなく点燈に至るまで職員會を開き、編輯の會議を續け、更に幾夜か十二時を過ぐるまで口角泡を飛ばしつゝ

論議したる中に鄉土精神の眞諦に觸れ、今では鄉土人にあらざゝ職員が鄉土人の及ばざる鄉土愛、鄉土改善熱に燃えてゐるのである。小西博士は教育の本質觀の中に「教育する人の意志、その價値生活に權威を感じ、敬と愛と信と感謝が自然に起る」と述べられてゐる。教育は教育する人とさるゝ人の內面的接觸生活である。教師自らが鄉土精神を体認し、鄉土愛が高潮されてゐるならば、兒童は之に感じて鄉土を意識的なる鄉土として認識せんと思慕するに至るのである。故に教師は先づ鄉土研究をなし、鄉土を正しく認識せよと私共は叫ぶものである。

二、教育基調としての鄉土研究

鄉土研究は歐洲に於ては勿論新興米國に於ても相當以前から行はれたものであつて、我が國に於ても狹義の鄉土研究は古くから行はれ、明治以後特に明治八年から二十年頃までは各府縣地誌が編纂せられ、更に二十四年に制定せられた教則には鄉土云々のことが澤山に見られ範圍は更に擴大されて來てゐる。其後法令の改定によつてその語は除かれた。然し此の頃までの鄉土研究は何と言つても現在の鄉土研究とはその趣を異にしてゐた。それが明治四十三年頃になつて、柳田國男氏、新渡戸稻造氏等によつて鄉土會が組織されて新しい鄉土の研究が試みられたのであつた。

最近鄉土教育の思潮が、行詰れる概念的教育主知主義教育に反抗してとなへられ教育界を風靡するに至つて、鄉土研究の聲が各地に叫ばれ、學者も亦しきりに學說を述べ、地方實際家に鞭うつやうになつた。然し乍ら鄉土研究の本質を遠く離れて邪道に走つたり、或は教育實際家が教育の立脚点を忘れて學者の提燈持ちをしたりして、有閑階級の道樂であるかの如く非難せられたりしてゐる向もある。

そこで教育實際家としての鄉土研究、教育への鄉土研究とは如何なる本体を有するものであるかを明確にしなければならない。今私共はこれを教育基調としての鄉土研究と言つて置かう。

史學の上から言つて其の時代に於ける一切の現家を網羅したからといつてそれは決して歷史でない樣に、鄉土研究に於ても百科全書的に鄉土の總ての事象を調査したからとて、それが鄉土研究ではあり得ないのである。これに關しては商大の石田龍次郎氏が「鄉土科學」の十三號に於て詳細に述べられてゐる。然し私共も或期間はそんな道を歩んだのであつた。歩み疲れて教育基調としての鄉土研究へと立ち歸つたのである。

よく聞くことであるが鄉土調査も結構であるが調査倒れになつてしまふ、と言ふのである。誠に其通りで、今までの樣な研究の方法で進むならば全く調査のための調査に終つて、しかも其の調査に際限もなく調査に疲れては中絕するばかりである。私共は調査研究の態度を明確にして置くことを必要とする。即ち私共は鄉土を一つの生命体として其の地域的進化を明確に把捉せんことに努む。今其の態度をやゝ詳細に述べて見る。

1、生命体としての鄉土の綜合的研究態度

鄉土は吾等の母胎であつて吾々はこの母胎の懷に育まれて來たものである。鄉土は單に客觀的存在としての冷かな特定地域を限るものでなく又其の特定地域內に於ける文化を指すものでもなく、この自然と文化との綜合体であり、忘れんとして忘るゝことの出來ない、離れんとして離るゝことの出來ない特別なる親和關係に置かれたる地人渾一の融和体である。故に吾々の母胎としての鄉土は廣義には國家であり全人類である。然し今茲に論ずるものは國家の基底としての特別親和關係を有する或る地域を指すのである。

物質的文化は人間の精神作用が加はつてその文化に特徵を有するものではあるが、それと同時に精神的文化は又物的な條件の影響を受けて發達するものである。其の二つの文化の綜合的な進展の中に私共は地域的な特徵を見出し得るのであつて、其の集團的な特異性と親和關係とを有する最も基本的なものは發生的な村落である。故に行政的な町村は第二次的に來るものであると見做す。けれども其の行政的な町村が一つの發生的村落から成つてゐたり、町村制實施以來町村の總べての活動が發生的村落に近き關係にあつて親和關係が深められてゐるものは教育基底に置かれる鄉土となすべきである。若しかくの如き關係をも顧慮せずことさらに發生的聚落に限ることは却つて部落根性を濃厚にし、排他的氣分を強からしめて自治の圓滿なる發展を

妨げることになる。私共は鄉土教育によつてこそこの部落根性を排除し、偏狹に陷らざらしめんとするものであつて、發生的村落を鄉土の基底となすことの誤解を恐れるものである。

この留意をかぐならば直ちに鄉土研究はお國自慢であり、鄉土教育は偏狹排他であるとの謗りは免れ難い事になる。私共の念願は鄉土精神の個に徹することによつて、國家社會の基底として豐偏妥當なるものに至らしめんとするものである。

鄉土精神を体得し其の生命に觸れんとするならば、其の研究は綜合的でなくてはならない。そして其の相互關係と因緣を明かにする事が重要である。最近に於ては個人心理學に於ても分析的見方から形態的見方に進み、民族心理學も分析的から更に綜合的に進みつゝある樣だ。民族精神はその綜合的の流の中に育まれ行くものである。けれども生命は抽象的には表し得るものではなく之を概念的に說明しようとしてもこれは出來ない。たゞ鄉土の具象を通じて味はひ得らるものであつて、概念化されたものはたゞ生命の粕に過ぎないのである。そこで私共の調査研究は最も具体なるものでなくてはならなくなる。

現今までの鄉土研究は徒に統計のみを集めたり、數人の人物傳を調査したりしてゐた樣であるが、それでは到底吾等の要求は滿たし得ないものである。それよりも鄉土人の步んで來た生活によつて如何にその生活が進化し、尙それが如何なる因緣に於て現在鄉土の人達に結ばれてゐるかを鄉土の具象を通じて味はつてみなくてはならない。統計や人物傳記もこれ等相互の關係を如實に知るために重要性を持つてゐるのであつて孤立的に價値を有するものではない。故に統計や人物傳が如何に詳細に調査されてもそれは決して鄉土研究が出來たものとは言へないのである。同樣に鄉土の地理がどれ程專門的に深く研究されても前述の樣な考察を通じてゐないならば、私共の叫ばんとする鄉土研究にはなり得ないのである。

石田龍次郎氏は「鄉土研究者は專門學者にならうとするのでなく、專門學者のなさざること、即ち綜合体としての社會鄉土地域を明かにすればよいのである。」と言はれてゐる。

それを專門學者でないが故に鄉土の研究はなし得ない樣に思つて鄉土研究もよいが、吾々には出來ないものとして全く餘所事の如く考へたり、或は一つの專門的の知識があると無闇矢鱈にそればかりの研究調査に沒頭してたゞ其の一部面のみ深くして一向に全体としての研究に至らなかつたりする事が現在地方に於ける實際ではないかと思はれる。私共の如き小さい學校では、さやうな專門的な知識や趣味を持つ各方面の人々を教員として持つことは出來ない事である。若し專門學者のやうな研究でなくてはならないならば、田舍は永久に鄉土研究が出來ないと言つてもよい。けれども私共の叫ばんとする教育基調としての鄉土研究は石田先生の言はれる樣に專門學者のやらない綜合体としての鄉土研究をするのであるから、私共貧弱なものにも尙且つなし得るのである。否寧ろ專門學者にあらざる故になし得るのである。

然しこゝに注意すべきことは、專門的でないと言ふ事は常識的であることを意味してはゐないので常に科學的研究でなくてはならぬし、又專門的な根底から離れてゐてよいと言ふのではない。たゞ私共の目標とする所を外して深入することを謹むべきだと言ふので徒に常識に流れたり、獨斷に陷つてはならぬ事は固より明かな事である。

例へば私共の盛は大体聚落から東は古世層の粘質土であつて、西は花崗岩系統の砂質土であるが、これ等を地質學的に如何程深い研究をしても又各所に於ける二者の錯綜狀態を詳細に分布圖に表しても、それが吾等の祖先の生活更に現代の農業經營の上に如何なる影響を持つてゐるかに及ばないならば、それは單なる專門的の研究に過ぎないものである。それよりも私共はこの二つの異つた地質が過去に於て鄉土の人達に如何なる生活をなさしめたか、如何なる恩惠と不幸をもたらしたかを究め、更にこの地質の上に立つて將來鄉土の農業を如何に進展せしむべきかを考察すべきである。

即ち鄉土の相互的關係と其因緣を明かにせんことに努めなければならない。

小田内先生は其著「鄉土地理研究」に於て「大地に卽したる生活の考察、殊にそれが親しみ深い鄉土生活の考察に就いてすら極めて斷片的な分析的研究方法のみに終始して、生活の地域的實在を摑むに必要な綜合的考察を逸してゐた憾があつた。」と述べられ、更に概念的教育が地方の實生活に適合した施設をしなかつた事、之によつて鄉土の科學的認識に就いての實證的研究が輕んぜられてゐたが、最近に於て地理學の綜合的考察が行はれる樣になつて鄉土の科學的思索によつて大地に卽した生活本位の教育を施さうとする熱烈なる慾求の起つて來た事を說かれてゐる。地理學に於けるこの傾向は私共の鄉土研究に於て

最も重要視すべきものである。即ち鄉土研究に於ては分析的研究に終らずして之を綜合的に考察して科學的に認識せしめ其の生命を体驗せしむる事が最も重要である。

2、有機体としての鄉土の分析的研究態度。

分析的研究は綜合への前提としての研究でなければ其の生命を失ふものである。綜合体としての鄉土は有機的であるが故に其の生命を有するものである。有機的なるが故に之を研究するに於ても單に歴史的に偏したり、地理學的にのみ陷つたりしてはならない。更に社會學的經濟學的等各方面からこれを調査研究しなければ鄉土生命に觸れることは出來ない。從來鄉土研究と言へば鄉土史研究の樣に思はれしかも少數の人物傳や戰爭記の詳述か、さもなくば考古學的な骨董いぢりに過ぎない感があつた。それが地理學的研究を叫ばれる樣になつてからは鄉土地理研究即鄉土研究ででもあるやうに考へられてゐる者も少くない樣である。此点地理學者たる小田内先生が私共實際家に特に注意される事は最も敬服する所である。

一つの鄉土の現象も一方的研究では如何程深く專門的智識の上から研究しても到底その眞髄に觸れる事は出來ない。

例へば盛の部落の密集性を研究するとしても地理的に觀察すると地形的にも地質的にも今の住宅地域が人間の居住に好適であり、飲料水及風の關係から論じても當然こゝに聚落を構成すべきである。けれども何百年か經つてゐる内に此等の條件を度外視して散村すべき幾多の地理學的な條件に迫られながら尙今日多大の不便不利の下に密集を續けてゐるのである。この密集の原因は如何に專門的の知識を持つてしても地理學的にのみ考察するならば誠に難い事である。更に歴史的にこの密集を强ひた幾多の事實を私共は見逃す事は出來ないのである。即ち盛は三原瀬戸に望んでゐて今も内海の交通路として大船巨舶の航行をみるのであるが昔も同樣でこれは「交通上の大三島」として鄉土讀本下卷に簡單に述べてあるが、この交通路に海賊が出沒して陸上にまで其の掠奪を恣にしてゐたからこれを防ぐためには密集して其の團結の力に賴まなければならなかつた。我が大三島は何れの部落に於ても此の影響をかなり受けてゐるのである。更にこの密集を餘儀なくしたものは德川時代の土地共有の一畝前制度である。即ちこの制度が甚しく散村を防げてゐた。又移住者の常として排他的な思想が濃厚であつて其の集團生活の外に出づることを甚しく厭ふ一種の部落精神とも言ふべき社會心理に支配されてゐる。私共はこの密集性を社會學的の立場に於て充分に考察して見なければならない。私は或時青年に向つてしきりに散村の必要と其の利得を說いた。所が其の内一人の青年は「連が二三人あれば西の耕地へ向つて移住するだけの決心はありますがさうすると嫁に來てがないかも知れない。」と言つてゐた。

かくて此の密集性が鄉土への生活に如何なる關係を持つてゐるか。これも亦各種の方面に其の影響を及ぼし、しかも有機的に置かれてゐるのである。即ち經濟生活の上には多大の損失を與へ、耕地賣買價に於ても他地方に於ては見難き變態を來してゐる。（讀本參照）密集して他部落との交渉少きため遠き昔の異部落間の女子掠奪の保護防備觀念が尙流れ來つて部落内の女子獨占性と排他性は近親結婚を多からしめてゐる。一方に亂されざる生活をなし來つてゐると同時に文化の恩惠に浴する事の少い欠陷と頑固にして引込思案的な消極的な思想を濃厚にしてゐる樣である。（盛氣質參照）かくてこの密集狀態が村人の生活を支配してゐることは夥しいものである。

この樣に居住なる一つの地理的現象も各方面からこれを觀察する時鄉土人の生活に離るべからざる有機的關係を持つてゐるのである。故に有機体としての鄉土研究は各方面からこれを分析的に行はなければならない。

三、鄉土教育の實際

1、教育者自覺のもとに職員總動員となれ。

鄉土を調査すること、鄉土を研究することを區別してゐる學者もあるが私共は今便宜上兩者を併せて取扱つて置くことにする。鄉土研究の態度を前述の如くとしても其の調査研究すべき事項は實に多岐に亘り量に於ても隨分多い譯である。これを一二の人に委ねたり、或は鄉土の研究は歴史地理の學科擔任者の仕事であると考へたりする樣では其の研究を教育にまで役立たしめる事は到底出來ない事である。特に聲を大にして叫びたい事は校長自らがこれに對する理解と見識を持つてゐなけれ

ば其の効を收めることは不可能であると言ふ事だ。校長自体が袖手して職員に調査せよなんて言つてもそれは全く駄目である。自ら其の先頭に立たなくては職員も底力は出て來ない。私共の經驗から言へば最初の一年位は職員は、校長も餘程の物數奇位にしか見てゐなかつたが今日では若い人達に校長は引きづられてゐる有樣である。

次には女教員である。これ又全く無關係で、そんな事は其の趣味の人達か或は男教員の仕事かの樣に考へてゐる者が多い樣である。其の理由は私達はあんな事には趣味もないし一寸も解らないと言ふのである。それがいけないのだ。私共は教育を趣味や道樂とは考てゐない。實に戰鬪だと考へてゐる。解らないからこそ一層にやらなければならないのだ。共々に調査研究をして鄕土認識をしなければならぬ。鄕土の人であり乍ら鄕土認識の不足せる人は幾らでもある。教師自らが認識不足で鄕土教育は出來ない。そこで私共の學校では總動員で調査研究を續けて來たのである。それは一つには學校が小さいから手が足りないと言ふ事と一つには總動員でやる事によつて全職員が鄕土を明かに知る事が出來、更に其れが人事ではなくて自分自身の問題となつて來る。これが鄕土教育の効を收めるに重要な事項である。大三島鄕土研究の委員會でも常に問題となる事は來年度から委員の一人に校長を必ず入れよ、と言ふ事である。それは委員の二人や三人で研究してゐるのでは充分に出來ないのと、それを教育にまでと考ふる時は校長の理解の下に時々は總動員でやらなくてはならぬ事を意味してゐるのである。私共の學校では未熟ながら總動員で調査研究をなし更に總動員で鄕土讀本の稿を起し數十日間編輯の會議を開いたのみならず幾度も深更まで續けたものである。かうして出來上つた鄕土讀本は自分の作つたものとして教育の實際に如何に利用しなければならぬかを自己の問題として研究されて行くのである。

鄕土の調査研究はかくして進んで行かなければ教育の實際にまで役立つものではないと私共は信じてゐる。

2、兒童に調査せしむるもの。

兒童に調査せしむるには調査其の事によりて鄕土を体認せしめんとする目的的方法と、教師の調査研究を補助せしめんとする方法的なものとの二者がある。目的的には鄕土調査により多き關心を持たしめる事が出來る。兒童は異鄕の窄には珍しさが故に一種の興味を持つが鄕土そのものには比較的無關心な場合が多い樣である。例へば日出日入と言ふ樣な事であつても理科に於て秋分春分は眞東から出て眞西に入ると、概念的には知られてゐても實際春分の日には生口島（東にある）のどのあたりから出るか、秋分の時は西の山のどの邊に入るか更に夏至冬至の日の出入と其間に於ける移り方を絶えず觀察せしめて圖表せしめてゐると案外に興味を持つて來る。そして兒童自身の住宅或は教室へ照り込む日光の有樣にまで注意をする樣になる。かうして教科は彼等の生活にまで結ばれて行くのである。其他氣象に關する觀察をさせたり、或は花暦、鳥暦を作らせてみると兒童は次第に自然に對する興味を增し鄕土の自然に關心を持つ樣になる。自然のみならず人事に關しても同樣である。

方法的な調査をせしむる中にも勿論これ等の目的を達することは出來る。然し方法的に教師の補助として調査せしむる場合に留意すべきことは一目明瞭なるものを選ぶべきである。卽ち數的なるもの或は量的なるものでなければならぬ。例へば住宅の調査をせしめるとしても、修繕を要するや否や或は台所、便所の設備の完、不完と言ふ樣な事は兒童には判斷し難い事である。若しか樣な事まで教師が勞を省くために調査せしめると全体としての判斷を誤る事が多い。それ故に電燈の數とか風呂の有無などの數的なるものに限らなければならぬ。

數量的なもので兒童に調査せしめると案外調査が進行すること、父兄達か一々先生に家をのぞかれるいやさを少くする事が出來るので鄕土調査には是非必要な事である。たゞ相手が兒童である故に其の種類と範圍に留意しなければ其の効を收め得ないのみならず却つて大いなる誤を生ずる場合がある。

3、統計の利用

いゝ加減に物事を片付ける事をこの邊では官業と言ふ。其の理由をよく聞いてみると、村役場などで主務省などから各種の統計調査が來ると一々出來ないから「先づこの位か」といゝ加減に數字を表していく。それを意味したのだと言ふ。全國的なものや全縣的なもので其の大數をみればよい樣な統計ならば、それでも目的は或る部分達し得られると思ふが、狹い範圍に於

ける調査では意味をなさない。故に此の種の統計を其のまゝ利用するならば樂ではあるが鄉土の診斷をする場合には誤解を生ずる事がある。故に面倒であつても學校自体で調査する事が肝要である。けれども官廳役場の統計何れも然りとは斷じ難い。それで信用し得る物はなるべく利用すべきものだと思ふ。農業調査、國勢調査、基本調査、或は死亡、出産各種の台帳など可なり鄉土調査研究に利用すべきものがある。

4、鄉土研究座談會

醫者が最も注意して診斷しなければならぬ患者は親しい友人と肉親であると言つてゐる。それは都合のよい方へのみ解釋せんとする傾向があるから誤診をする事があると言ふのだ。これと同じ意味のことが鄉土研究に言ひ得る。

前にも述べたが繰返して言ふならば鄉土人は馴れてゐるが故に冷靜に客觀的に觀察する事は出來難いけれども、鄉土人にあらざれば味はひ得ない鄉土を体認してゐる。私共が如何程鄉土の調査研究をしても鄉土人に及ばないのは即ち其の神祕的な領域である。それは感情價値は他へ傳へ得ないがためであつて、佐藤教授はこれを生得本能であると言はれてゐる。故に私共が鄉土研究をするにはこれ等鄉土人と親しく膝を交へて鄉土の事など聞くべきである。其の中に私共の觀察の誤つてゐる事や皮相な事なども見出したり、其の神祕的領域に幾分でも近づく事が出來るのである。

古老との座談會……昨年十一月に廣島高師で開かれた鄉土教育協議會の座談會で鹿兒島師範の代用附屬の主事が次のやうな話をした。

「私の學校は鏡小學校と言ふ。征韓論に破れた西鄉南洲は鄉土私の校下に歸り產業立國の策に蹴起して自ら田園の生活をなされた。其頃既に鏡校は存在してゐた。村の若者は南洲に校札の揮毫を依賴した所、早速書いてくれたので其の後長く校門に掛けられてあつた。當時若者であつたその古老を一日訪ねた所、此の話をされて今どうしてあるかと尋ねられた。私は全く知らない。そこで歸校の上物置を色々と探してみると其の下積となつた一枚の校札がある。これを古老に示したが全くそれに相違なかつたので、今は校寶として大切に保存してゐる。若しこの話を聞かない中にこの古老をなくしたら何時かの物置掃除の時に燒かれてしまつたであらう。古老は今年八十幾才である。」と、明治初年のことなども鄉土に關する記錄は少く殊に鄉土人の人間としての生活記錄など殆どないと言つてもよい位である。けれどもこれを古老に聞くならば、五六十年位前の事は充分に知ることが出來る。老人などは昔の事でも聞くと得意になつて話してくれるものである。けれども頑徹が多いからたゞ一人の古老に就いて充分に話をきゝ次ぎ〳〵とそんな會をして、それ等の話から綜合して其の時代の鄉土を推定する事が必要である。決して一人の言をそのまゝに直に信じてはならない。時には數人の古老を集めて座談會を開くことも肝要である。此の場合には互に補正し合つて話が最も面白く進み且獨斷に陷らないよい点を持つ。何れの場合に於てもこちらから一つの目標を定めて聞くこともよいが何か若い時の面白い話を聞くと言ふ態度がよい樣である。すると案外な事を聞くことが多い。殊に私共の校下では一種の語り部の樣なものがあつて冬の夜長を昔語りに更かして忘れない爲幾回も村の事どもを語り傳へてゐる者がある。そんな人達と話してゐると鄉土研究など離れて實に面白いものである。今の若い者等はこんな話には一向耳を傾けませぬと歎いてゐる。今の中にこれを記錄にして置くことは私共の一つの務めであるとも考へられる。

壯者との座談會……鄉土研究が何時も骨董いぢりの如く考へられ、過去の穿索のみに陷り易い樣に鄉土研究座談會であつても、古老のみの會合であつてはならぬ。意氣に燃えて現代に活動してゐる壯者と鄉土の產業、自治、人情風俗を語り合ひ、更に將來に向つての發展を考究し、理念たる鄉土建設の希望を抱かしめなくてはならぬ。これはたゞに鄉土研究と言ふ意味でなく廣義の鄉土教育をも意味するものである。この種の會合は村に於ける各種の役員のみならず、精農家、研究家などをも網羅して談合すべきである。この座談の中に私共は鄉土の人達に接近し、數字に表れざる部面の鄉土を認識することが出來て鄉土精神を味はひ得るに至るのである。

5、教員直接の調査研究

鄉土研究に於て重要なるものは教員自らが直接に調査することである。これは實に厄介であるが、教師自ら鄉土を体認するには是非行はなければならない。勿論前述のものもこれを整理綜合する上に於て私共の手を煩はさなければならないが、それ

とは意味を異にしてゐる。

踏査……私共の校下は盛一部落、しかも珍しい密集の狀態にあるから、一度赴任すれば直に校下の景觀や住宅の有樣、生活の外形など、其の概要は觀る事が出來るが、部落が廣範圍であつたり、多數に分れてゐたりすると、先生は赴任して一年しても行かない部落警見さへしない部落があつたりする。これでは兒童の生活に喰ひ入つてこれを指導せんとするが如き教育はなし得ないと思はれる。私共は單に其村を外形的に知るだけでなく、其の實質的な生活にまで入つて、生命体として鄕土を全体的に認識しなければならない。例へば盛が耕地への距離が餘り遠くて時間の徒費が多いと言ふ樣な事でもそんな概念的な扱をしないで、實際にどの耕地へは往復に何程の時間を要するか、教師自ら其の耕作道を時計を持つて踏査してみなければならぬ。小さい坂道を登り行けば如何に鄕土の人達が苦勞してゐるかも想像され、鄕土人と相語る時も互に其の意を言外に了解し合ふ事も出來る。そしてこの密集村落に於ける經濟上の損失を村人達に說くにもこの踏査によつて得た各耕作道の等時点を連ねた耕地に對する等時線を示す時は（下卷參照）彼等の會得を容易ならしめるのみならず、これが直接教育にまで持ち來たさるゝにはこの具体的なるものを通じなければならないのである。かくて自ら勞して踏査することによつて鄕土人の生活を幾分なりとも体驗し、更に之によつて種々なる鄕土の具体的研究をなし得るのである。私共はこの踏査によつて三十分線を越えて野小屋の多きを知り、これが農作物の變遷と如何なる關係を持つてゐるかなどを研究する事が出來た。（下卷參照）其の上これがやがては散村すべき一つの過程であるとも考へられた。かうして踏査すべきことは地形、地質などと幾らでもある。しかもその踏査する中に豫期しない新事實や現象を發見することもある。野外の踏査は大概無事であるが聚落内殊に住宅などに關するものは村人達の了解を得て置かないと充分に其の効果を收め難いのみならず誤解を招くことがある。長崎市の小學校の先生が實地調査をしてゐると新聞記者と誤られて大變に迷惑をした事があると言ふのを聞いた。私共が隣村の大原で井戸の調査をしてゐた所、井戸檢査のお役人と思はれた事がある。誤まられる事はよいとしても其のために眞の調査の出來ない事は遺憾である。

文献……鄕土に關する文献は田舍では殆どないと言つてもよい位である。そこで私共は諸種の台帳を基礎としての調査すべき幾多の事が考へられる。即ち戸籍に關する役場の諸帖簿では出生の數、死亡の數、これが年齡別、病名別及此等の各種パーセンテイヂ、これによつて私共は色々の研究をなし得るのである。古い記錄が寺院や神社、舊家などにある、これも鄕土の研究には必要なもので、小野武夫農學博士は村の明細帖から小作料や農家の耕作段別を研究したり、田畑永代賣買證文によつて地價を算出する法を示されたりしてゐるが誠に面白い事である。盛の西光寺に年中行事錄があるがこれを讀むとこの時代の村人の生活が想像される事が多い。寺の過去帖などによつても單に其の死亡の數を知るのみならず、これによつて他の部面の事象をも研究し得られる。私共は過去帖によつてこれを經驗してゐるがこゝには略しておく。

かうして古い記錄を見てゐる内に村人達の物質的、精神的生活の一部面に觸れることが出來るのである。日本精神を研究しようと思へば古事記を研究する事が大切である。修身教育に於ても教材の原據的研究を叫ばれることは原據を通して其の人物の生活を体驗せしめんとするものであつて知識として之を知つてゐて、知的に取扱つてもそれには陶冶價値が少いのである。鄕土教育に於ても同樣でたゞ鄕土の事象を單に數學的に知的に取扱つたら方法としての鄕土教育は成立つても目的としての鄕土教育にはなり得ない。故に私共は教師自ら先づ鄕土を体認するには直接踏査し、或は文献により、或は座談會を催しなどあらゆる方法によつて教師自ら調査研究に專念しなければならない。

6、第二次生活地域の研究

用語が適當でないかも知れないがこれは今まで述べた鄕土を今一足延ばして鄕土人の生活に多くの交渉を持つ一つの地域をさしたので、こゝでは大三島をさしたのである。鄕土を一つの小さい部面に孤立的に考へないで、或地域の中に浮べて之を觀察し、比較研究しなければならない。更に國家の全視野の中に鄕土を置いて觀なければならぬ。鄕土教育の目的原理の上に立てば鄕土を体認せしむる事であるが、鄕土を体認せしむることは鄕土に拘泥せざる鄕土人を養はんがためである。

鄕土研究や鄕土教育がお國自慢や偏狹であると言ふならば、それは當に邪道に陷つてゐるものである。その意味に於て最も

卑近に第二次的生活地域の研究をして之と對比考察することが重要な事である。私共の立場から言へば大三島五個村十三部落を共同的に調査研究することである。大三島には八つの小學校があるが、この八校合併の大三島教育會に鄉土研究部を設けて各校に委員を二名宛置いて、同一歩調のもとに同一項目に亘つて調査研究をしてゐるのである。これ等調査事項を整理綜合して大三島鄉土研究素材として、それ等の統計、分布圖、傳記等を配布することにしてゐる。それ等の比較對照によつて私共は鄉土盛を一層明確にせん事に努めてゐるのである。さ様な例は鄉土讀本下卷に於て所々に表れてゐるからこゝに引例することを略して置く。

整理綜合……かくして調査せられた事項は鄉土を診斷する素材に過ぎないものである。更にこれを整理し、綜合的に考察研究することによつて正しき鄉土を認識し体驗するのである。

新渡戸博士は農業本論に於て「學問の要は綜合にあり。」と言はれてゐる。綜合的鄉土研究の必要は既に述べた所であるからたゞ個々に亘つて調査されたものは鄉土研究の素材に過ぎないものである事を力說して置く。

四、調　査　要　項

鄉土研究の態度及鄉土研究の實際的方法を述べて來たが然らば如何なる事項に亘つて調査すべきか。これは私共の歩み來つた小さい經驗に過ぎないので此の上尙調査すべき幾多のものが殘されてゐる事も思はねばならぬ。又他の人達が鄉土を調査する場合には之を省かねばならぬ項目の多い事をも考へる。

それは若しこれだけの項目を調査すればこれで鄉土研究は充分だなど言ふ樣なものであるならば今更鄉土研究もないものである。

鄉土の特殊相をみんなするならばそんな決定的なものでは物足りない事は明かであつて今から二十年程前に天降り式に作られた鄉土誌は各村各校に保存されてゐると思ふが、それが教育の實際にあたつて鄉土人としての陶冶の上に何程の價値を持つてゐるであらうかを思はねばならぬ。去りとて各鄉土は全然相異つた項目によつて調査されなければならぬこの理由も存在しない。卽ち人間生活の經驗として聚落發展の原則としてそこに普遍的な流れの存在することも亦見逃すことの出來ない事である。かやうな意味に於て私共の歩み來つた、更に歩まんとする道程を記述する事も讀者の幾分の參考となることであらう。

1、部落圖の製作

第一に部落の詳細な圖を調査しなければならぬ。これは役場に切圖の總括したものがあればこれを縮小するとよいが五万分の一の參謀本部圖を擴大してもよい。たゞ注意しなければならぬのは五万分の一圖は古いから其後耕作道路に變化のある事である。卽ち樹綠の昇降に注意せねばならぬがそれが又面白い事でもある。盛では全耕地に亘つて整理が行はれたので其の決定圖の千二百分の一があつたからこれを縮小したのである。

記入事項

方位と縮尺を明瞭にすること。土地利用の分布を明かに示すこと。道路は縣道、村過、耕道を明かにするのみならず名稱に拘泥せず荷車を通ずるもの、單に歩行出來得るものなどの區別をすること。公共的建物の位置、例へば役場、寺院、堂宇、神社、學校、郵便局又は箱場、掲示場、墓地、精米所、組合、共同井戸、公會堂、靑年會場、船つき場、ポンプ置場、集合場等

2、居住狀態

各戸の分布圖。密集又は分散の狀を明かにするために、点により其の所在を示すこと。若し出來れば住宅詳細圖として一々の宅地を明かにすること。

本支關係。最も古き舊家の來往したる由緣の確否。古き家の數と其の位置をも示す。　最近五十年間に分家したる家と其の位置。　分家することの減少と其の理由及時代、　失業者と歸農の概要。各戸の出入關係及職業的關係。

自然的要素、　如何なる地形に密集してゐるか、　飲料水を得る難易と其の形式及對策。ポンプか、井戸か、はね釣瓶か、又は昔のまゝか。　風の方向と其の對策。家の方向、屋敷林。位置等

習慣傳說によるもの。例へば盛では竹の下川から西は後家屋敷と言つて大抵皆後家になると言ふので厭ふ習慣がある。或はナワ目であるとか……の筋であると言ふやうな傳說の屋敷。

住宅調査。

住宅の態樣。　母家附屬建物の坪數及建築經過年數。　所有關係。　母家の屋根…瓦、草葺、亞鉛引。　母家の外壁狀態。

設備の概況。　便所の位置構造の良否。　排水設備の整否。　其他堆肥舍。厩舍。納屋の設備。

總評。現狀にて足るもの。　一部修理。　增改築。　除去新築を要するもの。

3、土地狀況

耕地利用の狀態。　水田と畑の反別。　所有者による分類。　耕作者による分類。　耕地に就いて維新以後著しく變化せる面積と其の理由。　耕地が山林となりたる理由とその方向及面積

德川時代(アラタメズ)に人口の增加に伴ふ食糧問題から松山藩などでは開墾を奬勵した政策の關係上無闇に開墾して舊耕地などはい、加減にしたのが維新後になつては開墾地の特点がなくなつて荒されて來たのが今も階段となつて名殘を止めてゐるものが何れの地にもある。リカルドの地代說の反對現象が行はれた名殘とも見られる。　維新後に於ける作物の著しき變化及其の理由。

土壤の特質と農具との關係及變遷。　一戶の耕作反別の變遷。　耕地土壤の深淺傾斜度、及其の系統。

山林。　樹木の種類。　地質系統。　所有關係。

4、經濟狀態

生產消費の種別。種量及變遷　生產物の販賣方法　季節に伴ふ勞力の過不足及其の補足法　生產勞働に關する共同作業の習慣及變遷。　田井戶にて給水する勞力調査と其の井戶の數。　道路改修による運搬具の變遷。　牛馬、荷車、荷舟による勞力補助、其の數量及一戶に對する平均等。　一年間の勞働日誌を精農、普通農、下農につきて。　一段步耕作に要する勞力　耕地の賣買價、地質地形距離によるもの。　消費の仕入方法と關係都市。　生產の分類。　村經費と一戶分擔額　土地所有關係、他町村民の所有と他町村にて所有する者。　預金と借財、賴母子數及一年間の掛金。　船舶其他の投資狀況。

信用組合利用狀況。

5、人　口

人口密度。全面積分の人口。　耕地分の人口生。　產分の人口。　山林面積分の人口。　戶數分の財力。　人口分の財力

出生、死亡、增加率。

人口累年統計。乳幼兒死亡と百分比。

移住、來住の地方、及其の數及職業別。

6、社會狀態

規約、講等の明治以後に殘つてゐるもの又は廢止されたもの及理由　新に設けられたる重要な規約　本支關係其他の關係に於ての規約の存廢と理由。

教育狀況　小學校教育の現狀と變遷。　中等以上の教育概要。　社會教育の變遷及現狀（文庫、新聞購讀者等も含む）

交通狀況　鄕土の生活に關係大なる都市への距離、時間、賃金、回數等。　他の地域との交通關係。　古い交通路、新しい交通路。　郵便、電信、電話の利用狀態。　等時線、等賃金線。

寺院、教會の活動狀況と宗派別戶數

保健衛生等。

井戶の數及住宅に於ける位置、共同井戶と其の理由及變遷。　風呂の數及使用度數。　流、炊事用煙突等、台所の完、不完全。　醫師、產婆の有無と其の位置。若し他村にある場合は其の距離と所要時間等。　電燈使用の家と其の燈數、ランプ使用數と其の理由。

各種團体と其の活動。

結婚風習と其の變遷。

7、歴史的調査

聚落の起源、記錄、口碑傳說。　神社寺院の位置、緣起、由來、變遷、遺跡。　聚落發展の方向と理由。　國史又は地方に重要なる關係を持ちし人物事實と其の時代。　戰病死者。　地域發展に關係深き人。これは在來の鄕土史研究には見逃された事であつて以前は國史地方史に關係深き人か或は官廳などより表彰されたとかいふ人のみを調査研究してゐたやうであるがたとへ一國の文化の上に直接に大いなる影響のない人であつても人間苦をなめ眞實に人としての生活をした者は鄕土の發展や鄕土人の生活に深い關係を持つてゐるものであつて鄕土史の上には見逃すことの出來ないものである。由緒的地名、起源的地名

口碑傳說。　民謠方言等祖先の生活を物語るもの。　其他地域的進化に關係を有するもの。

8、氣　象

氣溫調査、每月平均、一ヶ年平均、等の外自然觀察によるもの、風の方向。

雨量の每日及年平均の外日照日、雨天日等。

これ等風寒暑に對する對應策。

9、代表農家調。これを選ぶには其の人を得て充分の理解のもとにしないと、直ちに租稅に影響するものとして實際をそのまゝに語らないのと綿密な人でないと其の正確なるを保し難い。

家族人員。性別、年齡別。出入關係。

家構と其の配置。間取、生業との關係、氣候との關係、住家以外の建物と其の利用狀況。

宅地と其の利用、干場、庭園、菜園、肥料の置場、井戸、立木等の狀況。

生產並に消費の種別、數量、價値等の概要。

生產勞働表、月別、耕種別、主要農具の種類と点數。

三、鄕土讀本の編纂

一、編纂の趣旨

鄕土教育の第一歩は教師先づ鄕土を認識せよ。其のためには教師自ら鄕土の調査研究をしなければならぬ事を叫んだが、最後に於て其の調査研究を教育の實際にまで如何に及ぼすかが重要な事項である。

鄕土教育の施設としては、鄕土室の經營によりて最も具体的に如實に鄕土を認識せしむる事も必要であらうし、又鄕土室と言ふ樣な常設的な施設が出來ないため、時機に應じて鄕土の生活を語る遺物や記錄を展覽に供したり、或は各種統計數字を興味あるグラフで示して、兒童に鄕土認識をせしむる一助としたりする事も亦大切なことであるが、更に進んで鄕土の調査研究を最も具体的に兒童の程度に應じて絶えず提供する事は教育の實際の上に有要な事であり、鄕土を体認せしむる上に欠ぐべからざる事である。兒童に絶えざる鄕土的糧として提供せんとするものが鄕土讀本である。

讀本と言ふ名ではあるが決して國語科のためになどと限られたものではない。各教科の內容を網羅したる合科的なものであつて、鄕土のありのまゝの姿を如實に表した綜合的な一つの鄕土誌的なものである。私共が鄕土誌の名をさけた事は鄕土誌材に過ぎないからである。鄕土誌となればより以上に專門的である事も必要であり、も少し學的に体系付けられてゐる事も要件となるのではないかと考へたので特に盛鄕土讀本と銘したのである。それで名は鄕土讀本であつても兒童用盛鄕土誌の內容を持つものである。故に吾等の祖先の生活を或る一つの事象を透して伺はしめ或は具体的な存在としての現象を知らしめ更にかくあるべきものとしての反省をなさしめんがために現在までの調査研究事項を基礎として如實に書いたのである。勿論調査された事項が全部かゝれたものでもなくたゞ鄕土を認識せしむる上にこの素材をどの程度にとり入れて如何に生かすかには苦心したつもりではあるが充分に私共の趣旨を徹底せしむる事が出來なかつた。

換言すれば鄉土による卽ち鄉土に立脚したる教育の材として又鄉土への教育卽ち鄉土再認識への教育材として編纂したものである。故に各項に於ても其の二つの立場が伺はれる譯である。

上卷は尋三尋四用として、中卷は尋五尋六用として書かれたものである。この尋常科用は最も斷片的に讀物的にしかも兒童の生活を中心にして書いたのである。

下卷はやゝ村誌的に鄉土史的に大体時代の順を追うて德川時代前、德川時代、明治、大正時代、現代とその時代に於ける鄉土人の生活を伺はしめ更に理念としての盛の建設にまで思ひ到らしめんとすることに努めたものである。卷末へは參考資料として管長好傳、統計類、鄉土年表を附錄としたのである。長好翁は我が大三島の生める陰れたる維新の勤王家で老後を大三島に送られたので鄉土に深い關係を持つてゐる。浦賀紀行及其時の米艦見取圖など尋六の國史教科書の挿繪と比較して興味があるので中卷へ入れたがやゝ詳細に記述する必要を感じこれを下卷の附錄にして國史教育に資せんとしたのである。村人の生活を語る統計類は鄉土を認識する上にも必要であるし又鄉土による教育をなすの一端にせんがために加へたものである。これ等はなるべくグラフ分布圖に表したかつたが經費の都合上思ふ樣に出來なかつた事は遺憾である。

鄉土史年表は盛全体としての歩んだ跡方を一目に見たいために作つたもので、中央の史實に何等關係がなくとも鄉土としての出來事は之を記入したものである。

從來の鄉土史を見るとそれが縣と言ふ樣な廣い場合でも或は一市町村の狹い範圍であつても表彰された篤行者や或は政治的に活躍した人物傳乃至は戰爭史的な中央的史實の分派としての詳細を盡した樣な部面が多いと思ふ。それは誠に結構なことであるが私共が鄉土を体認せしめんとするには、それ丈では餘りに、物足りなさを感ずるものである。祖先が活動した背景としての鄉土、鄉土によつて生かされ、關係づけられた祖先の生活々動が、現在我等が鄉土の發展成長に如何なる關係に置かれてゐるかをも物語るものがなくてはならない。

それは丁度在來の國史教育に於て、政治史的に戰爭史的に其の經緯を說いた樣な教科書をそのまゝ授けたのでは國民生活の眞相や民族理想の根底には觸れ得ないのと同じである。國民生活の舞台としての國家はあらゆる文化を通じなくては理解されるものではない。鄉土史の研究も祖先の信仰的經濟的社會的各方面の生活しかも中央史實に關係薄くとも地域的鄉土的進化と活動に關係あるものは之を收めなければならぬ。兒童用鄉土史としての下卷にはか樣のものを何等かの形に於いて表したいと努めたのである。かつて「村の生活」を出版した時或先輩があの項目は何かからとつたのか又は君の考でやつたのかと言はれて私共が鄉土の個性を出すために獨持な項目で記述してゐるのを激勵して下さつた事がある。これは決して自惚を言ふ譯でなくて、村の個性を出さうとする時千編一律な個條的なものでは其の目的は達し得られないのである。鄉土史であつても國史を地方化した樣なものだけでは其の價値は充分であるとは言へない。隨つて在來の町村にある鄉土史とは幾分趣を異にして國史の地方化と言ふ樣な部面の價値には乏しいかも知れないが他の方面に於て幾分かより以上の價値を持つてゐるだらうと信じてゐる。村誌と言ふ樣な意味に於ても同樣な点を見出す事が出來ると信じてゐる。けれども下卷に於ても概念的には取扱はないでなるべく具体的な事象を通じて各方面から鄉土の過去及現在を觀る樣に努めた。

私共は兒童用鄉土誌としての盛鄉土讀本を編纂するに當つて以上の如き態度をとつて來たけれども未熟なる者の集りで充分に其の目的を達し得なかつた事を遺憾としてゐる。たゞ今後先輩諸賢の御指導と私共がこれを實地使用しての經驗から有意義に利用して其の欠陷を補ひたいものであると念願してゐる次第である。

二、編纂の實際

前述の如く私共の編纂の態度は確定したのであるが實際に當つて如何なる材料を選ぶべきかは相當に考へた問題である。その範圍に就いても鄉土を發生的村落としての盛とのみ限定しないで第二次的生活地域としての大三島中よりも其の材料をこり入れることにした。我等の大三島が生んだ人間苦を嘗め盡して口總を永遠に救うた作方富助、德化島中に及んだ僧光圓、体驗より生まれた慈悲心を我等祖先の島民達に施した下見吉十郎の功、維新の志士と交り國事に參ぜし管長好の意氣。何れも兒童

に鄉土意識を鮮明ならしめ人間陶冶に其の價値の大なる事は言を俟たない。かやうな人達の生活及これによる私達祖先の受けし恩惠を如實に知らしむる事は教育理念の上より有意義な事であると信じてゐる。けれども盛は盛としてのものがなくてはならぬ。大三島鄉土讀本編纂の議もあるが勿論無意義のことでないとしても、それだけでは之又物足りない。盛としての獨自性を持つものがなくては盛をはなれきることは不可能であると信ずる。故に其の材は大三島の中からとり入れるとしてもこの態度は忘れられてはならぬ、しかもそれが我等の盛と結ばれたる關係に常に留意しなければならぬ。例へば下見吉十郎にしても上卷に於ては吉十郎の島民を思ふ愛の輝を、中卷には日本廻國日記を拔抄して其の修業の狀と困難を偲ばしめてゐるが、下卷に於ては享保の饑饉を持ち出して、島民達は他鄉に多くの餓死者を見ながらも其の厄に遭はなかつた幸福を其の當時盛部落の死亡數より實證して其の德を偲ばしめんと努めてゐる。

次に同一材であつても編纂趣旨に沿ふやうなものは其の異つた部面を異つた態度を以つて表現してその材を明かにせん事に努めたことは前述の下見吉十郎の如きもので其の他にも幾らも出してある譯である。殊に下卷に於ては一の事象に就いても成るべく其の理由や原因を明かにせんとしたり、更に將來への希望にまで到らしめんとしたが故に上卷、中卷に述べられた事を繰り返した樣な所が段々見受けられるが、これも形に於てはとも角其の編纂の趣旨から言へば單なる繰返しではないし、又繰返す事によつて其の趣旨に到達せん事を期してゐるのである。

三、編輯會議

然らばかくして選ばれた材をかくした態度で誰が書くか。これが重要なる問題である。人間に自分のこと位大きな問題はない。それが他人が見れば實に些細な事であつても自己にとつては實に重大な問題として考へられるものである。例へば他人のことはそれが死と言ふ樣な事であつても實に簡單に片付けてしまふ。あゝ、あの人も死んだか、隨分苦勞をしたものだとか、或はもう死んでもよい時分だとか、まるで何でもない事の樣に言つてゐるが、事一度自己の上に來るとまるで死者狂である。

かうした心の働きの微妙さは教育上にも幾多見られるし又鄉土教育の一部面もこの上に立つてゐるのではないかと思はれる。

そこで選ばれたる材は校長が書くのでもない。國語の主任が書くのでもなくて、實に私共の提唱する「總動員」で書くのである。こゝに鄉土讀本も自己の問題として書かれ、書いたものは自己のものとなるのである。總動員で書くと言つても其の原稿は誰かゞ書かなくてはならぬ。そこで私共は上、中、下卷を全職員が分擔して其の稿を起し初めた。これが昨年十一月へ入つてからの仕事である。選ばれた題材を調査された材料によつて夜な〳〵書き始めて、氣の早い連中は學校へ持つて來て火鉢の側で讀んでゐる者もある。今まで掲示板へ一寸書く文句まで賴まうとしてゐた樣な人達も書く〳〵。そして十一月の末からいよ〳〵編輯會議に移つた。書かれた原稿は何れも謄寫にして全職員に配布されて毎日々々職員會である。低學年の方は漢字からして問題が多い。假名遣がなか〳〵である。然しそんなことよりも書かんとする內容と其の表現法が問題となる。無遠慮に寄つてたかつて批判訂正をやる。すると作者はしきりにその態度と趣旨の辯明をやる。駄目だ。削れ、徹回、書替へ、實に眞劍である。私共の長い教員生活の中にあれ程眞劍な會議をした事がない。ほんたうに涙ぐましい光景であつた。一つの稿に一時間以上二時間かゝるのだからたまらない。冬の日は短い、教員室に電燈はない。点燈時には會議を閉ぢなくてはならぬ。日は經つ、會議は進行しない。遂に夜間會議が若い人達の間に叫ばれ學校から直ちに校長の宅に集つて會議を續ける。かうした事が幾夜も〳〵なされてしかも十二時より早く會を終る事は全くなかつた。これでは餘り疲勞する事も恐れたが、なあにやるのだ、突進だ、と全職員の意氣は實に當るべからずだ。かうして日曜日も全部出勤して上卷と中卷はやつとの事で十二月中に終へた。

下卷の編輯會議は一月に入つてから續けられ幾夜かの夜業をしてとう〳〵廿六日に會議を終へた。一度審議し終つた原稿は更に淸書して訂正個所の引合せと全体としての構成語感など靜かに誰かの音讀を聞きつゝ吟味するのであつた。

四、使用の態度

前述の様に名は郷土讀本であつても國語にのみ使用されるのではない。修身、地理、國史と各科に於てこれを具体化し理解を容易ならしめる材料は之をその必要に應じて使用するのである。かくて教材を郷土化し、郷土を科學化せんとするものである。故に同一材料も幾回か利用され又大体は上、中、下を學年に配當してあつても決して之に拘泥するのではない。然し未だ編纂して日尚浅く之等の材料を系統的に各教科に利用するの成案を得てゐないで之を記し得ない事を遺憾とする。

盛郷土讀本

はしがき

郷土を愛することは、正しく郷土を知ることであります。ところが、私共は盛に生れ育つて、日々其の土をふんでゐながら、實際は盛のほんたうのすがたを、知らないものであります。それはちやうど、自分の顔が見えなかつたり、手や足を別々に見ることが出來ても、ほんたうの自分の姿は決して見ることが出來ないのと同樣であります。

ほんたうの自分のすがたを見るに、最も都合のよいものは、鏡であります。盛のすがたを見る鏡にと思つてつくつたものが、この郷土讀本であります。書かれてあることは、盛の一部分の事のやうでありますが、上中下と其の異つた味を、ほんたうに味はつてゐる内に、くもつてゐる所も次第にはれて、今まで

は盛の人であるが故に、盛を知らなかつたことも明かになり、盛の人でなくては味はへないよい所も見出されて、あたゝかい人間の心持がずん〳〵このんで行きます。

それが、盛を愛する心となり、國を思ふ心となつて行くのであります。

この讀本は、先生方が總がかりで、夜を日についで書いて下さつたのであります。御骨折り下さつた諸先生に感謝すると共に、皆さんが十分に味はつて、共々に盛を愛し育てゝ下さるやうに祈つてやみませぬ。

昭和七年一月二十日

森　光　繁

もくじ

一　神社……一
二　私どもの學校……三
三　まりつきうた……五
四　くんれん……六
五　いたみのねえさんから……八
六　三戸の池……一一
七　一里三里五里……一三
八　子守うた……一八
九　下見吉十郎……一九
一〇　河野通有……二三
一一　村の四つ角……二七
一二　弓祈禱……二九

もくじ

一三　むくつきうた……三一
一四　と・し祝……三二
一五　船端さん……三五
一六　盆をどりの夜……四〇
一七　ふうせんうた……四三
一八　木綿會社……四四
一九　ひめさかさま……四六
二〇　蜜柑……五一
二一　お手玉うた……五四
二二　總代さん……五七
二三　もみすり……五九
二四　村の生活……六四
二五　盛口村……七〇

一　神　社

學校の裏手に、こんもりとしげつた森があります。これが私共の村をお守り下さる社の森です。石の鳥居をくゞつて、のぼる石段の左右には、何百年かたつたと思はれる大きな松や、しひの木が、枝をさしかはしてゐます。

手洗鉢の水で、手も心もきよめて、拜殿の前で心からおいのりをします。本殿には應神天皇、神功皇后其のほかの神樣がおまつりしてあり、右手には、多くの神樣をおまつりしたお宮があります。拜殿には、繪馬がたくさんあげてありますが、これは村の人が、何かの記念にあげたもので、中にさげてあるてんのみごりは、その年のぶじをいのつてあげたものです。

お社はいつごろからこゝにおまつりしてあるのか、よくはわからないさうで

すが、何でもこの村がはじまると一しょに、村の人たちが、こゝにおまつりしたものだと申します。

その頃から、私共の祖先の人々が、どれだけおいのりをしたことでせう。うれしい時、かなしい時、何につけても村の人は、まづおまゐりします。田畑のゆきかへりの途中、お宮の前を通る人は、必ずをがんで行きます。よそへはたらきにゆく人も、おまゐりして出て行き、よそからかへつた人もおまゐりをします。ながらく他所へ行つてゐた人が歸る時、お宮の森が見えると、

「何となしに涙が出る。」

といひます。私もこのあひだおまゐりした時、心のそこからありがたい氣持がしました。

二　私どもの學校

大師堂の所を出ると、學校は一目です。前の池にはあひるが仲よくならんでゐをあさつてゐます。學校も元は、正面と右がはのと二棟ばかりでしたが、先年新校舍がたてられて、コの字なりに並び、運動場も廣くなりました。

今朝はまだ早いので、大きな男の子が六七人、バスケットボールの練習をしてゐるばかりです。今高二の女生徒が、小さなバケツを持つて、にはとり小屋へ行つてゐます。ゐをやるのでせう。白い胸毛を風にふるはしながら、ここことこ金あみのきはに集つてくるのはかはゆいものです。

門の左のユウカリは、大きなかげを教員室の入口にまでなげてゐます。元このあたりから、校舍のまはりは、高い杉垣にかこまれてゐましたが、新校舍を

たてるために切りはらはれ、その代りにばらをたくさんうゑたので、よほどさつばりしました。その上、みなが自分の花ゐんに、思ひ思ひの花を作るものですから、いつも赤白こりごりの花がきれいにさいてゐます。

春は美しいふげんぞう櫻も、夏はみごりの葉をしげらせてゐる栗のふる木も、いまはすつかり葉をおとしてゐます。唱歌室の前の大かへでは、はうきを立てた樣です。

私は一人でボールなげをして遊んでゐるうちに、友達も集つたので、ドツチボールをして遊びました。みんな元氣よく遊んでゐると、「始め」のかねが鳴りました。これから先生も生徒もそろつて、ちくおんきに合せて朝會の体操をして、氣持よく教室へはいるのです。

三　まりつきうた

一ばんはじめの一の宮
二でにつくわうこうせうぐう
三またさくらの宗五郎
四でしなののぜんくわうじ
五ついづもの大やしろ
六つむらむらちんじゆさま
七つなりたのふごう樣
八つやはたの八まん宮
九つ高野の高野山

十で東京明治神宮

四　くんれん

目はさめたが、ぬくもつたふとんの中からはひ出すのがたいぎなので、ぐづぐづしてゐると、

「なんだ、かめの子の樣にくびを出したりひつこめたりしてゐるぢやないか。」

と兄さんにいはれた。見ればはや、くんれんのふくを着てゐる。

「こんなに早く行くのですか。」

「うん。早く行かないとおくれるからね、もう國政さんは來てゐられるかもしれん。」

「國政さんはずゐぶん大聲ですね。」

「あれは縣一だよ……あの大聲は、國政さんの熱心さをあらはしてゐるのだよ。しんせつていねいで、それにあの熱心だ。それを思ふといくらたいぎな時があつてもなまけられない。」

「盛のくんれん所がほめられるのも、あたりまへですね。」

「よい人があつたものだ。だからくんれん所だけでなく、せうぼう部長、そうだいさんと、やくはたいがいたのまれる。先年も、くんれん所の仕事をやめようといはれたのだけれど、村の人がみんな國政さんより他にあんなよい人があるかといふし、役所の方からも、あの立ばな人をやめさせてどうするのかといはれるので、又おねがひした位だよ。」

「兄さん、兵隊さんに行くかどうかわからないのに、くんれんをうけるのですか。」

「兵隊に行くからうけるのではないのだよ。若い時にはうんとやつておかない

こだめだからね。それに國政さんの様なよい人に指導してもらへるのは又とない幸福だ。あのがうれいをきくと胸がすつとする。」

こんな話をしてゐると六時がうちました。兄さんは、

「なむさんおくれては一大事。」

となにはぶしをやりながらとび出して行きました。

五　いたみのねえさんから

お父さんはじめ皆様どんなにしておいでですか。

私もあのむつかしい身体けんさに心配したのも、はや三月の前になり、仕事の様子も一通りわかり、友達にもなれて來て面白くはたらいてゐますから御安心下さいませ。

こゝでは毛を糸にとり、それを色々のおりものにしますが、コンクリートれんぐわ造りの工場が八つもあり、ひろさは盛の村位で、職工は男女二千人からうへ居ります。私は第七工場にゐますが、盛から二十人も來てゐますけれど、みなちりぢりになつてゐるので顔を合すことはめつたにありません。

はじめは、まよひ子になりはしないかと心配したり、友達はなし、さびしい思をしました。

朝は六時のサイレンで起き、七時に仕事にかゝり、晩は六時まではたらきます。

みんな黒のつゝそでに、はかまのそろひで、せつせとはたらくさまは勇ましいものです。

よくはたらくのでごはんはおいしくいたゞけます。私は來てから少しこえ

ました。毎日同じやうにはたらいてゐても、よく出來る日と出來ない日とあつて、仕事の多く出來た日ほど面白いものはありません。

うれしいのは日曜日と、國からの手紙です。病氣で休むと、日曜にもはたらかねばならないのがくるしいさうですが、私はまだその味は知りません。

寄宿舍では夜や休の日に御花、さいほうなど敎へて下さいます。私も一生けんめいならつてゐます。

このごろでは着物も一人でぬへる樣になりました。

賃は一日九十錢で四箇月ごとに二錢から四錢位まであがるさうですが、私はまだはじめですから、こんどはあがりますまい。はたらくことは少しもくるしくはありません。

私の事はくれ〴〵も御心配なさらない樣にねがひます。

お盆にはみんなにおみやげをたくさん買つてかへります。どうか御用心なさつて下さいませ。

三月二十九日

山田花子　樣

姉より

六　三戸の池

あの三戸の池。私どもの村で二番目の池。島の人は誰でも知つてゐる池。この池を造るには大へんなお金とよほどの人手がかゝつたのです。

もとこゝには三つの池があり、右左には松林がひるでもさびしいやうにしげつてゐて、上手には廣い〴〵しばふがあり、夏も知らない涼しい所でした。いつもすみきつて底の小砂も數へられる美しい水でした。

その池はみんな今の池のごてごなつてゐます。ごて幅が八十八メートル、長

さ百四十メートル、盛の田から出來た米を二百五十年分も入れられる大きさです。二ケ年の間私どもの父さんや母さんたち何百人の者が、毎日毎日朝のくらがりから、晩は星の出るまで土をこぐ、かつぐ、トロツコをおす、ゐのこをつく、石灰を運ぶ等、目から火の出る働のたまものがこの池なのです。

その時分この有樣を見た人たちは、これが出來上るものであらうかと思つたさうです。

この池のおかげで、畠が田にかはつたのが八町歩で、秋の日、思ひもよらぬ山根に黄色の波を見られることゝなり、

「盆が來てこそ麥に米まぜて」

と歌はれてゐたのも昔の事になつてしまひました。

七　一里三里五里

ぶうー、あゝ津島が來た。七時十五分、今治行ぢや。ぶうー、又津島ぢや、八時。忠海から竹原行よ。昭和が來た。尾道行、九時が來たのか。十一時には又今治へ、午後には尾道と今治行で一日中に六回も發動船がついてゐる。

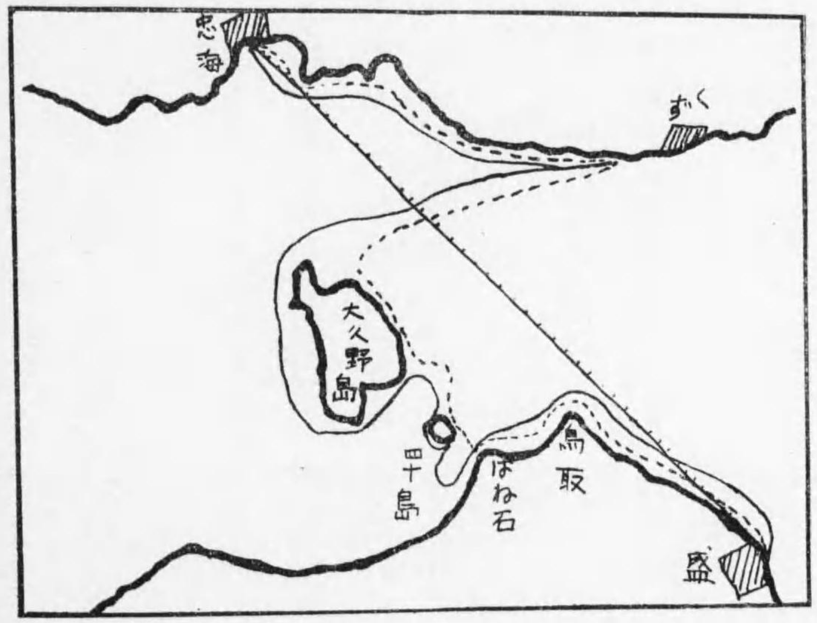
今治へ二時間半、尾道へ二時間、忠海へは二十分、まことに便利なことである。

或る晩お父さんに、

「忠海へは何キロあるのですか。」

とたづねますと、

「何キロつて、そんなことは知らないが、昔は一里三里五里といつてゐた。」



「一里三里五里、そんな道のりのよび方があるのですか。何里何町何間等とは聞いたこともありますが。」

「それがなう面白いのぢや。」

と次の様なお話をして下さいました。

「潮がよければすうと眞直に行ける、これが一里。さか潮になると、ここから鳥取、はね石へと漕ぎ上り、四十島へ渡り、久能島へ漕ぎつけ、それから久津へ渡つて、忠海へ行く、これが三里。かへる時には、久津まで上つても久能島の下手に流され、それから四十島、

はね石、鳥取へと漕ぎ上つて歸つた、これが五里である。それで一里三里五里といふのぢや。」

とおつしやいました。

「一里三里五里、よくわかりました。では今治や尾道へは。」

「そりやあ同じよ。今治へ行くのでも下げ潮を岡山村の三つの小島まで下つて、そこで潮まちをして渡つた。どんなに早くとも一日はかかつたものだ。もし向ふ風にでもなると、二日でも三日でも寢て待つてゐた。時には片道に三四日もかゝつたものだ。それからしばらくして宮浦へ横須賀丸が着くやうになり、今治、廣島などへ汽船で行くことが出來たので、島の人たちは便利になつたと、皆よろこんだ。

それから御島丸といふ發動船が盛へも着くやうになり、ろなしで今治、尾道などへ行けるやうになつた、がこれも少しの間でやんだ、しかし井口へは水

調丸といふ小汽船がつくやうになつて、宮浦まで出なくても渡られて、やゝたすかつたのであつた。

その次に今の津島丸が池田さんのおかげで着くやうになつたのだ。その頃西村正義さんが忠海行の盛丸へ發動機をすゑつける、つゞいて八幡丸、金比羅丸と出來た。

今ではどこへ行くにも、わづかの時間で潮の心配なしにいけるやうになつたのだ。いつか瀬戸田へ行つたのに六日目にやつと歸つたことさへあつた。とても今時の人には考も及ばないことだ。」

とおつしやいました。

なほお父さんは言葉を續けて、

「お前達はラヂオや電話は近頃のこと、知つてゐるであらう。ところが電燈や荷車、自轉車等は昔からあつたやうに思つてゐるであらうが、これも皆近頃

のことだ。

父さんが始めて自轉車を見たのは今から二十三四年前で、忠海へ行つてゐる多和さんが乘つて來られた。もしどこへでも、こまつたものなら人山を築いた位だ。それが今では一寸田へ水をくみに行くのでも乘つて行くといふしまつだ。

荷車にしても十四五年前まではなかつた。電燈等になるとことに昔のことが思ひ出される。毎晩々々ランプの掃除。いそがしまぎれにやつてゐると、ほやを落して割つたり、石油をつがうとするとなかつたり、とてもらんをやつたものだ。それにもしも割らうものなら大變なことになる。手間はとる、あぶなくはある。電燈のやうにすみ〳〵まで明るいことはないし、今から考へるとまことに不便なものであつた。とても父さん等一代の中にこんなに電燈の下で食事をしたり、新聞を讀んだりすることがあらうとは夢にも思はれな

かつた。かはればかはつた世の中よ。」
とおつしやいました。

八子守うた

ねん〳〵〳〵
ねん〳〵よ
ねんねのもうりはどこいた
山をこえ里へいた
里のみやげになにもろた
でん〳〵太鼓にしやうのふえ
誰が吹いてもならなんだ

ねんねが吹いたらぴとなつた。

九下見吉十郎

正徳元年十二月二十二日のうすらさむい夕方、伊集院村の百姓士兵衛のかたむきかけた門口に足をとめて一夜の宿をたのむ六部があつた。

これは子供四人に死なれたかなしみを、日本中のお宮お寺をめぐつてなぐさめようとする下見吉十郎である。

正直となさけ深いので村人から佛の土兵衛とよばれてゐた主人は、よろこんで宿をかしてくれ、妻や娘はいそがしい夕飯のしたくをしながらもいろいろと世話をしてくれるのであつた。足を洗うてのびのびとした氣持で「廻國日記」をつけてゐた吉十郎は、だいどころからくる、いままでかいだことこもない、う

まさうな食物のにほひをふしぎに思つた。

まづしいがしかしゐがほにみちた夕飯の時、おわんにもりあげられてあたゝかいゆげを出してゐるものにおどろいたが、あたりの人がさもうまさうにたべてゐるのにそゝのかされて、おそるおそる一口たべた吉十郎は

「これは何といふものですか。」

とおどろきの聲をはづませた。

「いもです、あゝあなたはよその人だ。まだこれを知らなかつたのですね。これはいもといふものです。」

「おいしいものですね。私はこんなおいしいものははじめてゞす。これはどんなにして作りますか。」

主人からいろ〳〵とつくりかたをきいた。

「たいへんたやすく出來るやうですが、日照りの年でもできますか。」

「えゝ、いもはまことによい作物で、雨がふつてもふらなくても出來ます。それにたくさん出來ますから、百姓は大だすかりです。この國の百姓は米や麥が出來ぬ年でもいものおかげでたべものは安心です。」

毎年々々雨につけ風につけ苦しい思をして、ひでりの年などははねつるべに數へきれない程水を汲んで、その上虫や嵐のために一粒もとれず、食物に不足する位はまだのこと、かつゐ死のかなしい目にあふ國の百姓のことが吉十郎の心にうかんだ。あゝこのいもを持つてかへつたら、もう食物に心配することはないのだ。

「御主人、このいもを二つ三つ下さい。國の百姓のなんぎを救つてやりたいのです。」

「いやいやたいへんです。それはなりません。これは支那からつたはつた大切なもので、この國のたからです。百姓の命です。もし他國の人にわけたこと

が知れだら重いばつをうけねばなりません。」

いも種一つわけてくれるやうすもない。

食物のまづしい國の段々畠に、このいものつるが青々とのびた時力一ばいくはをふるつて大きないもをほり起す百姓のゐがほ。

「國の人々のためだ神樣も守つて下さるであらう。佛樣もおゆるし下さるであらう」

吉十郎はこうこういもを二つ三つぬすんだ。荷物のそこにしつかりとしまつて二十三日の朝まだ暗いうちに土兵衛の家を出て國に向つた。

いもを持ち出したことが知れたら重いばつをうけねばならぬ。しかし人々のために決心した吉十郎を神佛もお守り下さつたのか、無事に大三島へ歸ることが出來て、いもは島に作られることになつたのである。

それから二十年ばかりの後、日本中に大きゝんがあつて、多くの人が野に山

にかつゐ死をした時でも、我が大三島や近くの島々では、一人の死人もなく、安心してくらすことの出來たのは全く下見吉十郎のおかげであつた。

一〇　河野通有

敵の夜討をふせぐために、ずつと後に陣をこつてゐる味方にはなれて、河野通有は三島大明神の旗をおしたて、石垣の外に少しの兵を左右にして陣をしきました。

伊豫の國を出る時

「もし今から十年のうちに敵が攻めよせて來ぬ時は、こちらからおしよせて日本のいきほひをみせてやります。」

こおいのりを書いた紙を、明神樣におそなへして來たのです。今度こそ、さん

ざんに敵をうちやぶつて、日本一のてがらをしようとまちかまへてゐるのに、いきほひにおそれた敵は、船をくさりでむすびつけて一足もあがつて來ず、ただ遠くでさわぐばかりです。

いく日まつても花々しい戰はありません。もうかうなつてはこちらからおしよせるばかりだと決心して、小舟二さうに兵をのせ、今こぎ出さうとする時、どこからきたのか白さぎが一羽、かぶら矢をくはへて、へさきに立てゝある三島大明神の旗の上を、すれ〳〵に飛ぶよとみるうちに、羽音いさましく、はるか沖の方、美しくかざつた敵船の上にゆき、かぶら矢をおとして、そのまゝみえずなりました。

これを見た通有は、

「大明神のおまもりがあるぞ。あれこそ大將の船にちがひあるまい。さあゆけ。」

といさみにいさんでこぎ出しました。

味方はこれを見て

「伊豫の河野が討つて出たぞ。」

「あの小勢で……」

とおどろくもの、かんしんするもの、

「日本兵がせめよせたぞ。」

と一時はさわいだ敵兵も、いう〳〵と敵船の間をおしわけて大將の船に向つて進む小舟を見て

「ほつておけ。あの小勢で何が出來るか。」

「大方かうさんに來たのであらう。」

と矢一ついかけるものもありません。目ざす敵船にこぎよせた通有は

「それ進め。」

と一いきに斬りこまうとしましたが、敵は目にあまる大船、そうたやすくはの

ぼられません。

いまゝでぼんやりしてゐた敵も斬りこまれては一大事と、あわてゝ矢や鐵砲を雨のやうに射かけます。みる〳〵うちに味方はたふされ、通有も肩を射られたが、少しも弱らず、ほばしらを敵船にうちかけ

「伊豫の國の住人河野通有、」

と大聲になのつて、する〳〵とほばしらをつたうてをどりこみました。

「大將につゞけ。」

と口々にさけびながら、つゞいて斬りこむ兵士たち……。

おにの樣ないきほひにおそれた敵兵は船ぞこににげこんで手を合はすもの。にげそこねて海中におちこむもの……。なかに手向ひするものがあつてもたゞ一うちです。

通有が大將をいけどりにして、その船に火をかけてやきはらひ、萬ざい萬ざいとかへる時、三島大明神の旗が博多の海にひるがへつてゐました。

一一　村の四つ角

村の四つ角
自轉車が通る。
鈴をならして
西東。

村の四つ角
牛馬がかよふ。
車を引いて

荷を負うて。

村の四つ角
里人が通る。
くはをかついで
右左。

村の四つ角
盛の都。
組合　會場
火の見台。

村の四つ角
日は落ちかゝる
島の一日の
標準時計。

一二　弓祈禱

二時間の授業もすみましたがやはりちらちら雪が降つてゐます。でも今日は舊正の九日、村の弓祈禱のある日です。

急いで歸りました。食事をしてゐますと下隣の友一君が

「行かうやあ。」

とよびかけてくれたのでろくゝ食べもしないで飛び出しました。

學校のあたりから大きな字を書いたのぼりが幾すぢとなく、さむ空につゝ立つてゐます。鳥居のあたりでは、道の兩がはに菓子屋や、さたうきびを賣る人が火ばちを前において店をはつてゐます。

石だんを上つて氏神樣ををがみ、下りて右にきれると射場があります。其の途中には、ふうせん玉を賣る店も出てゐます。おもちややには、ラツパや、刀や、おき上りこぼしや、つゝや、いろはがるたや、でん〳〵だいこ等きれいにかざつてゐます。あめ屋や菓子屋では、へうきんなこゑではやしたてゝお客をよんでゐます。

ちやうど人の出さかりでごちらへ行くにもよういでありません。やつとのことで二人はせりわけ〳〵射場まで出ました。射場では十二人の射手がそろひの上下で今にも射ようと身がまへしてゐます。

後は色々な花で射手も見えないまでに飾つてあります。その花は親類の方が下さるのだといふことです。又花の後の方には神主さんがきちんと座つてゐます。少し右前にも、さゝ竹に七夕祭の時のやうに色紙をくくりつけたのがたくさん立ててあつて、そこには高一の子が二人、もんつきの羽織にはかまをつけて座つてゐます。矢拾です。

僕等が行つてから、三度で大的はじりはづし小的にかゝりました、小的も三度でいよ〳〵終りました。その後ではそれ〴〵の射手や矢拾の花讀、あちらこちらの子供がならすふえやラツパやなげ玉の音で大そうにぎやかです。

まだ讀み終らない中に、友一君はあめ玉とラツパ、僕はさたうきびと竹菓子を買つて歸りました。

晩には射手と矢拾は、こう屋へまねかれて行きそれを村の人達は夜おそくまでちつと見てゐるといふことです。

一三　むくつきうた

一人きた　二人きた
みにきた　よつてきた
いつやの昔　なんこいや
やかましい　こゝのみちや
こほらさん。

一四　こし祝

舊正の二日から親類の人達が、お米においはひ餅一重、その上にこんぶをの

せ、反物をそへたつゝみ物を持つて、昨日は五人今日は十人と三四日の中に、四十人餘り來て吳れました。

口々に

「今年は御主人のおこし祝でおめでたうございます、これはお祝のおしるしに」

とさし出されます。

お父さんは今年四十一、男のやく年でやくよけにと祝つて下さるのだと言ふことです。

十日頃になると親類の人がたくさん來て尾道へ魚を買ひに行く、竹原へ酒をとりに行く、組合へお菓子やら、いもやこんぶ、にんじんなど色々な物を買ひに行く人もあつて、一日中は買物でてんてこ舞をしました。

翌日になると、洗ふ、切る、にる、膳、椀、皿、鉢の手入で、大さうごうでした。

いよ〳〵翌日の晩は本客で、七八十人が來る。内は朝早くから戰爭のやうでした。晩の八時頃から、三人五人組をつくつて來始め、九時頃近くに皆そろひ、御ちそうを出し始めました。さあ酒だ、わかすわかす釜でどん〳〵わかす。どても間に合はない。ひつきりなしに、からごくりは勝手の方へこもごつて來る。

二時間ばかしつづいたと思ふ頃、歌が出る。ついて歌ふ。後にはたいこの二つも出て、負けな負けなで家もさけるほど、さわぎ出しました。これもしばしの間で、一人へり、二人へり、十二時頃までには、皆かへつてしまひました。

夜が明けて見ると、ざしき中酒やさかなや菓子が、ちらばり、皿やさかづきのわれ、膳のこはれなど、どても目もあてられぬありさまでした。

それからは又、主だつた親類の人が後かたづけに二三日かゝり、お祝もいよ〳〵すみました。

其の時思ひ出したのは昭和四年のきやう土てんらん會です。あの時一番眼に

ついたのが、こくりこまんぢゆうでした。こくりは酒、まんぢゆうはお菓子、これで大三島中の飲高食高をあらはしてゐたことで、酒は盛が島の第一位で、一年に八千五百圓、一戸あたり貳拾六圓九拾錢、次は菓子で第三位、五千圓で一戸に拾五圓六拾錢の割でありました。日本の國は世界中でも、びんばふ國といつも先生から聞かされます。

何だかあんなお祝なんか、行くものの受けるものおたがひがめいわくだ。僕が四十一にでもなつたなれば、こんなことをしないで、この習くわんからのがれたいものだと思ひます。

一五　船端さん

つねは、かゞみのやうでさゞなみがひた〳〵と白砂を洗つてゐる盛の海も、

昨夜からふきまくる嵐に、白馬のをどるやうな波が海岸にぶちあたつて、石垣は今にもくだけさうである。空はすみを流したやうで、そのあひまあひまにいなびかりさへみえる。嵐はいまひどい力で盛の村をおしつぶさうとしてゐる。

ごうつとあれくるふ嵐の中から誰かのさけび、みだれた足音！たゞ事ではない。

「船……。」「船が沈みかけとるぞ。」

すは！と村人たちはあわてゝ海岸に集つた。見れば小さなれふ船である。嵐と波にもまれて石垣よりも高くはねあげられたかと思ふと、波のそこにひきこまれてみえなくなる。こまもかぢも洗ひながされた水船の底には、二人の老人が、夜からのはたらきに力もつきはてたのであらう、息もたえ〳〵になつて、船の底にしがみついてゐる。人々を見ても、もう助をよぶ聲も出ない。

「かはいさうに。」

「たすけてやりたい。」

みんなが一時に思つたけれど・この大波大風に助船を出せば、一メートルと進まぬうちに石垣にぶちあてられて死ぬばかりだ。助けてはやりたいが自分が死ぬかも知れぬ。

誰一人船を出さうとする者もない。見てゐるうちに船は潮におされて石垣に近よつてくる。ほつておけば波のために石垣になげられて、くだけてしまふのだ。女達のうちにはもう涙を流してゐる者さへある。

しかしどうしてやることも出來ぬ。五メートル、三メートル、船は石垣に近づく。大波……。

「あつ」人々は思はず目をつむつた……。

一秒二秒再び開いた時波の上には船のかげはなかつた。

荒波にのまれた老夫婦は神のたすけか、危く石垣にうちあてられようとする

ところを、決死の人々にやつと助け上げられたのである。村人の口からは思はずごつとよろこびの聲があがつた。しかしこの死にかけの人をこのまゝにほつておいては見ごろしにするばかりだ。目もうごかさぬまでになつた老人夫婦をとりかこんで

「どうしようか。」

と相談したがよい考もうかばない。

そのうちに一人二人と歸る人さへ出來た。

いまゝでぢつと心をおさへてゐた船端さんは、もうこらへてはゐられなかつた。人の苦しみ、かなしみをみて、自分の都合など考へてをれない船端さんである。いまゝで何人かのかはいさうな人にあたたかいたべものとねどこをめぐんでやつた船端さんである。

「皆さん、二人は私がひきうけました。」

この力強い聲をきいた村の人々は

「船端さんだ。」

「さすがは。」

「船端さんなら。」

と安心して歸つて行つた。この後、船端さんは老夫婦をひきうけて一週間もの間親子もおよばぬかいはうをしてやつた。死にかけてゐた二人はまたもとの元氣をとりかへすことが出來たといふ。二人のためには實に船端さんは命の親であり神樣であつた。

これは今から二十五六年前の話であるが、船端さんは今でも元氣で村のために自分のことを忘れてはたらいてくださつてゐる。

一六　盆をどりの夜

「あのお月様がまるくなると。」

と何日も前からたのしんでまつてゐるうち、いよ〳〵その日。ドンドコ。ドンドコ……村の青年がならす太鼓の音。……

一番太鼓、二番太鼓、男も女も一ちやうらいをきかざつて、いそ〳〵とをどりばに集つて夏の夜をたのしくをどるのです。

三番太鼓がなつて、いよ〳〵をどりがはじまる。

聲じまんの人が

「おやを……たづね……て……いしごうまあ……るうは……」

と音どをくどくと輪をつくつてゐる青年等が

「ヨーホイヨーホイ……」

とはやしながらぞろ〳〵まはります。

「盆が來たらこそ麥に米まぜて、それにさゞげをふりかけてコリヤあらめにかぼちやのさいそへてー。」

とへうきんな聲で昔のうたをうたつて人をわらはすこともあります。老人等は

「よい音どぢやなうや、いしごうまるぢや。」

「こゐがえゝわい。」

と音どに聞きいつてゐるもの。

「上の花子さんのはおりは拾圓出して、いたみで買うたのぢやげな。うちの娘の拾參圓で買うたのとまるでちがふわい。」

「やつぱり町で買ふとやすうて、えゝものがあるけれなうや。」

と娘等の着物のはなしばかりしてゐるものもあり、さまざまです。

子供等は、あたらしいゆかた、あたらしいせんす、あたらしい手ぬぐひで、ほゝかむりをして、

「ぼんせいぼ。」「パチン」

と友達の頭をたゝく。

「ありやツをどれやこな。」

追ふ、にげる、わけもなしにきやつきやつさわぎながら、人の間をくゞりまはつて、

「これや子供等ちいとおとなしにせえ。」

としかられたりします。

をどりはいま最中でいろ／＼のふうをしたをどり子が輪の中に、くははつて、てぶりも面白くをどる。音ごもをどりもひとりでにしまる。

月の光は水のやうにながれてをどりをたのしんでゐる人の顔をてらしてゐます。

時間はゆめの様にすぎてゆく。……

ドンドンドンドンいまゝで、てうしよくなつてゐた太鼓がみだれ人々がざはつきだし、をどりがやぶれると急にねむたくなる。

ふら／＼しながらうちにかへる頃は、月もかたむいて影が長く道にうつります。

一七　ふうせんうた

一つ人こしき
二で二反田
三で三ど田

四でしるかを
五で五反田
六つむぎしま
七つなが田
八ではちのしり
九つくちのたに
十でとつとり。

一八　木綿會社

もう三十年も前のこと、青年會場の所に二階造りの大きな建物がありました。それが㋐木綿會社で、社長は昭和五年の夏なくなられた麓常三郎さんでした。

何十人もの女工達が綿もぶれて、毎日勇ましく立ち働いてゐるのを目のあたりに見るやうな氣がします。

盛の家々では、をさを打つ音が夜もおそくまでしてゐました。

その時分は、たしかに私ごもの村は大三島の大阪で、井口、瀬戸、宮浦、大見、臺等いたる所へ支店を出しその支店からいつも木綿を積み付けては、へまるとかへて歸つて行くし、大阪からは日毎に絲を買込み、木綿として積出す等、港はいつもにぎはつてゐました。

このやうに盛を中心として、大三島全体に盛んであつた木綿織業も、本店を今治へ移してからだん〳〵さびれて來、タオルとかはり、大切にしてゐた機も今では大方灰となつてしまひ、時には涼臺としてゐるのを見受けます。あの勇ましかつた頃の盛がなつかしく思はれてなりません。

一九　ひめさかさま

はなぐりの瀬戸、たゝらのはなはあぜのはなにかこまれたしづかな村、甘崎の沖に、しろやま、こよばれる小さな島がある。昔はこのあたりは舟の道では大切なところであつた。

今は少しの松と、のこりの石垣が昔のやうすをかたりがほであるが、上の平なところでは、今もときに瓦のやぶれなどを掘り出すことがある。こゝは名のことほり、昔はお城があつた。

今から何百年か前、こしとつたお殿様が、少しの家来と、一人の美しいお姫様こで暮してゐられました。それは咲きほこる白ゆりのやうなけだかい方であつたのです。

はなぐりをながれる潮のうづまき、かすみのへうたん島、春秋のながめは人の心をなぐさめてくれるけれど、この年こつたお殿様の心からのなぐさめは、たつたひとりのお姫様であつたのです。

お城ではお姫様を中心に、春のやうにたのしく暮してをりました。しかし人の世にはいつまでもたのしい日ばかりがつゞくものではなく、こゝから少しはなれたところにすむ、心わるい海賊の大将が、お殿様の年こつてゐられるのをさいはひに、お城をせめおとし、美しいお姫様をもうばひとらうとして、ある夜やみにまぎれてせめかゝりました。

今までたのしく暮してゐた城の人々も、このむちやな敵を防ぐためには、弓をとり刀をにぎらねばなりません。さんざんにたゝかひました。

お日様はいつものやうに山々のいたゞきを赤くそめつゝおのぼりになりました。おゝこのむごたらしいありさま、矢があたつて死にかけてゐる人、もう死

んでころがつてゐる人、たくさんのきずをうけてうん〳〵うなつてゐる者、かなはぬながらも敵をふせいでゐる若者、これを見てもみな手きずを負うてゐる。石垣を洗うてゐる潮も今日は流れる血でまつかなしぶきをあげてゐます。敵はあとからあとからおしよせて大波のやうにせめかけます。お城では力のかぎりふせぎました。けれど何といつても不意を討たれたのですもの、それにほんのわづかの士しかゐません。血のやうな夕日が井口山に沈む頃、とうとうお城の門はやぶられてしまひました。

もうおしまひです。おにの様な敵は口々にわめきながらあらしまはります。あのなさけぶかゝつたお殿様も討死なさつたのでせう。

お姫様はもうこれまでと、さいごの思ひ出に美しくきかざつて、東よりのがけから海中へとびこんでおしまひになりました。

これを見た敵のものは、あわてゝ小船を出してさがしたけれど、うづをまいて流れる潮のために、とうとうおたすけ申すことができませんでした。

それから二日目の朝方盛の村人たちは

「死人が流れついてゐる。」

といふこゑにおどろいて、海岸へ集りました。砂の上に美しい着物をきた、けだかいおひめさまの死がいをみたのです。

「美しい方だ。」

「おいたしい。」

と口々にいつても、あまりのけだかさに手もださずがや〳〵さわいでゐる村人の中から、二三人の心わるい人が、人のとめるのもきかず美しい着物をはぎとつて死がいを又波の中におしながしてしまひました。

「なんといふ心のわるい人達だらう。きつところくなことはあるまい。」

と老人達がなげいてゐたとほり、その夜からいまゝで靜かであつた盛の村に色

々おそろしい事がわき上つてきました。お姫様に手をかけた人はまつさきに、おことわりでも申し上げるやうにしながら死にました。

いまゝできいたこともないわるい病氣がはやつて多くの若者が死んでいつたのです。

「これはきつとお姫様のたゝりにちがひない。昔の靜かな盛にするためには、お姫様をおまつり申し上げねばなるまい。」

とあまりのおそろしさにお宮をたてゝお姫様をなぐさめました。それからは、おそろしいたゝりが消えてしまひました。

それがいま「おごりば」にある「ひめさかさま」のお宮です。

二〇　蜜　柑

「お父さん蜜柑が大分大きくなりましたね。まだせんていしなくてもよいのですか。」

「いや蜜柑は植ゑてから三年位は、ずん〳〵のばさねばならないのだから、家のは來年からするのだ。」

「いつごろからなりますか。」

「植ゑた所にもよるが六年位することこれる。」

「僕が六年生になつたらとれるのですね。」

「さうだ。たのしみなものだ。百姓は何といつても、はたらくことが一番だ。はたらいてをりさへすれば、土といふありがたいものがはたらいたゞけの御

はうびを下さる。」

「土井さん方や大岡さん方のはずゐぶん大きいのですね。」

「あゝあれはもう三十年からになるからね。お父さんがお前位だつたその時のことで面白い話がある。」

「どんなことですか。」

「今から三十年も昔のことだ。「十年一昔。」といふから盛も大分ちがつてゐた。殊に百姓は昔からのしきたり通りをしたがるものだから、米麥いもより他は作るものではないと思ひこんでゐた。その時土井さんがあのよい畠にみかんを植ゑたのだ。村の人はおどろいてしまひ口々に「もの好にも程がある。」「ばかな事をする。」と笑つた。村の人ばかりではない。土井さんのお父さんはそれこそかん〳〵に怒つて、「あの上畠に木など植ゑてどうする。」と一本殘らずぬきすてゝしまつた。土井さんは一こともいはないでぬきすてられた、苗木をていねいに植ゑてゆかれる。又ぬく。植ゑる。何度ぬきすてゝも一つ一つ植ゑてゆく土井さんのむごんのたいどにとうとうこん負けして、ぬくことはよしたけれどその畠へは足ふみもしなくなつたといふことだ。それが今ではあんなりつぱなみかん畠になつた。土井さんの後に、大岡さんが山べりのせまい土地を買ひ集めた。「あんな山べりのぼろ地を、くるしい思をして開かなくとも、作るにみやすい畠がたくさんあるのに。」と笑つた村人も、新しく開かれた山畠に、みかんの木がぐん〳〵のんで、りつぱな實がなりだすと急に感心しだして、追々蜜柑を植ゑるやうになつた。三十年後の今では、二町何段からの蜜柑畠が出來、まだます〳〵多くならうとしてゐるのも、この二人のおかげといつてよい。しかしおとなりの鏡村があれだけの村で七十町のみかん畠をもち、ごし〳〵金をあげてゐるのとくらべると考へなくてはならない。」

「盛も早くたく山植ゑて負けない様にしなくてはなりませんね。」
「さうだ。しかしたゞやたらに植ゑてもつまらない。何事によらず何年か後の事を考へてやらないとせつかくの仕事がむだになる。蜜柑もよいなへをえらんでうまく作ることだよ。」
僕はこのお話をきいて三十年もの昔、村の人のわらひごゑにもかまはず自分の考をつらぬいた二人に感心しました。

二一　お手玉うた

お一つおとしておさら
お二つおとしておさら
おみんなおとしておさら

お手のせおさら
おつかみおさら
おちりんこおさら
おひだり〳〵おさら
くる〳〵まはしておさら
しはづけやつちょんめ
やつちよめやつちよめおさら
おてぶしおてぶし
ぶうしておさら
おんばさんおんばさん
ばあさんでおさら
しいるしる〳〵

しいるでおさら
おしゞ〳〵おさら
おさでおさら
ちいさな、はしくゞれ
くゞつておさら
おほけなはしくゞれ
くゞつておさら
どのむくりやんしよ
お一つやのおつの木
お二つやのおつの木
お三つやのおつの木
どつこい目が一しよう。

二二　總代さん

税を納める日が近づくと、小走さんが
「近日こりたての令書を組長さんのおたくにわたしてありますから、たゞいまうけこりなさいまあせよ。」
と大聲で村中の道をふれてあるきます。村の人は組長きん方からきつぶをもらつてお金のしたくをして待つてゐます。
いよ〳〵その日かくるとぶう〳〵とならすほら貝の音が村中へひゞきます。これをきいた村の人々は我一にと總代場へ納めに行きます。お父様のお話では
「私の村は税金のよくおさまることは日本一だ。」
さうです。

盛は昔一つの村だつたのださうですが、明治二十二年から井口と一つになつて、盛口村となり、役場はその方にあるので遠くでふ便だからこのやうなことは總代場ですまします。總代さんは集つた税金を役場へ納めて下さるのです。

村には總代さんが八人あつてそれ〴〵村の事をわけ合つて世話をして下さるし、又村を十六の株にわけて、これを組といひますが、組には組長さんがをられて組の事をして下さいます。

總代さんも、組長さんも、みんな村の人が選擧してなつていたゞくのです。自分らに代つて村の仕事をして下さるのですから、これらの人々の仕事がすこしでもたやすく出來るやうにしてあげることは、村の人としてのつとめです。

かうして村の仕事をして下さつて年一回、部落大會を開き、その年中にした仕事のありさまを村の人に知らします。

二三　もみすり

ゆめかと思つたがさうでない。たしかたれかのこゑが聞える。少しふすまを明けてのぞいて見ると、をかのをぢさんだ。いとこの正太郎君も來てゐる。ともゑさんは、をばさんにおんぶされてゐる。

「お父さん、もうおきようか。」

「まだ早い休んでおいで。」

ふとんの中に頭は入れたがねられない。ちん、一時か。

「友一君起きい。えゝがい。」

「おう。」

前のをばさんもをぢさんも來た。どうやら皆そろつたらしい、だい所一ぱい居

る。

起きて下の間へ出ると、もういつの間にか、よまにも、にはにもむしろをしきつめてゐる。庭にはうすにかせをかけ、たうみも入れてある。ごはんをいたゞいたのは二時ごろであつた。

「やろや。」

「やらう、ぐづ〳〵してゐると暮れるど、十七八もあるんだらうから。」

「さうよはなえよう。」

と一時に立つた。

西のをぢさんはおきまりでかしらにまはつた。ごろん〳〵うすはまはる。くわたこん〳〵と、たうみもまはる。ざしきでは六七人の女がけんどを前に手をふところにつゝこんで、米の來るのを待つてゐる。たうみにかゝつて四、五回けんどの目をくゞり、はじめてきれいなお米になる。かなりな小山が出來たこ

ろにはこりがないてゐた。

「みんなよつてつかあ、さめるけん。」

とお母さんのこゑに皆しきゐにこしかけた。ちやわんのそこも見えないお茶がくまれると、はしを片手に

「わしやきゆうしゆう。」

「わしやげんきを。」

等と大きな釜から思ひ〳〵に箸をつきたてて、こくり〳〵と、茶のたすけで食つてゐる。しばらくすると

「やろや。」

男は立つたが、女はやはり茶をのんでゐる。女が立つた頃にはもう上りはなには小山が出來てゐた。皆わちや〳〵大きな聲で話してゐる。話ごゑの高いのは、もみすりのくせである。お父さんはおいもゝ食べないで小山のお米をたうみに

かけ、新しい俵に入れ、三つ四つ口もくゝらないで、ざしきに立てらしてゐる。もう夜明けに近い。俵もだん〳〵まして來て日の出た頃には七八俵も出來た。

きんじょのこもだちも加はつて、十二三人が共に朝めしをすませて學校へ來た。まだ誰も來てゐない。今日はばかに早う來たものだと思つた。少しゝてほかの友だちも來だした。始まつてけうしつに入つたがなんとなしにおちつかない。ひるにも一團となつてかへつた。大ぐるわになつて半ばくのごはんをいただいたが、もうおひやであつた。ほかの人はこうに食べたらしい。こんどかへつたらこうふやおいもやあげなどでたいたおざふすゐだと思ふとたのしい。かへつて來ると、うすの音がしない。あゝ食べてゐるなと思つてこびこんだ。これだ。うんと食べよう。もみすりなればこそだ。

中で遊んでゐると、なんといつても十二三人の子供だ。お母さんに外へこうながされた。こんなにしんるいきんじょの友だちがあつまるのはこのもみすり

と、こえ出し、一年中二ごだけである。

夕方近いころ、うすの音もとぎれ〳〵になつてきた。ざしきではお父さんがやはり俵をこしらへてゐる。夕日が山にかゝつたころ、もうすんだと見えて、むしろを庭にほり出してたゝき出した。着物はほこりでまつ白だ。

庭にもみがらの山も出來てゐる。内のさうぢもすんだころ、きかへにかへつた人もぼつ〳〵來だしたので、皆と内へはいつた。きれいな俵が十九俵、下の間にきちんと積んである。夕飯だ。お米に大根のにしめだ。このもみすりの夕飯ばかりは、いつもこれにきまつてゐる。ざしきで一しょにいたゞいた。

近じょの友だちはかへつた。だい所の方では

「よけあつた。」

「もみがよかつた。」

「日入がよかつた。」

等こり〳〵に話してゐる。

もみすりの日取をして皆かへつた。お父さんは今年は思つたよりよかつたこと話してゐる。聞けばお母さんは昨夜は一つも眠らないでしたくをしたのださうです。

二四　村の生活

村は人家が三百二十程。それがずゐぶんこみ合つてゐる。瀬戸内海であるからおびほどの海にかこまれてゐて、春秋の景色は美しい。

一里の向ふ岸、忠海この間は大切な船の道で、あふぎ口から、くの島の下まで船でうづまることさへある。

西、南、北、の三方は、一面の田畠で夏は、水田、みかん畠、煙草、西瓜畠

がテープ畫の樣にならんでゐる。

發動船で今治から約三時間、ごうしん山の沖をかはると、目につくのは、池田さんのりつぱな家と倉庫の白壁だ。倉庫は昭和五年に出來た、島方にはまだめづらしいもの。「盛農業倉庫」と土井さんの書かれた字が朝日にかゞやいてゐる。

港から上る道は幅二間の大きなもので、これは村をつきぬいて山のふもとまで荷車を通すことのできる大切な通である。のぼる右左、町の樣に家がならんでゐる。そのうち青年會場前の四つ角に出る。そこには田舍に珍しい時計だいと火の見だいがある。

青年はこの時計ともすこし上の墓山にあるかねとで、村の人に時をしらせてゐるのだ。この四つ角から北へ行くと學校、お宮のところを通り、杉田造船所の上に出る。まだ〳〵行くと海づたひに肥海へ出る。

役場、駐在所、郵便局のある井口へは、この四つ角から東へ三キロメートルである。お寺へ用事のある人は、ずん〳〵上らなければならぬ。

お寺は四百五十年も前からあつて、盛の人家とくらべものにならぬりつぱなもので、入口にならんでゐる二本のアスナロの大木を見ると、山寺へでも行つた様な心持になる。門内は子供のよい遊び場だ。

稲の取り入れもすみ田に切かぶが兵隊さんの様にならび、かゞしが

「やれ〳〵今年もこれで安心だ」

と田のふちにねころぶ頃、りゆうわう山、たこうた山からふきおろす風に首をすくめる。もう何日ねると……と指をりかぞへて、まつてゐるうらにいよ〳〵ぼつたんぼつたんもちつきをはじめる。

うちにも明日つくのだと思ふと夜はねられぬ。お正月はもちつきの音と一しよに來る。學校もそこ〳〵にかへると池田の上、兎丸の横でたこ上げだ。

下ざやの松の木、大ばん樣のむくの木、村名物のいちじくのさきに買だちのたこをひつかける。三百年もたつたむくの木のさきつとにかけたらもうおしまひだ。

少しづゝのあたゝかさは、學校の梅、櫻、村のあちこちのなしのつぼみが、ふくらむので知れる。

おせつくにはたのしい山上り、

「早くかへらないとおべんたうがまつてゐるぞ。」

と先生にひやかされることもある。

四月一日は入學式。新しい學年に進み新しい本をあけるのも何だかえらくなつたやうに思へるものだ。

いもふせ、煙草の床作りと、子供も半人前のお手傳をしておくと、宮床まゐり、四月の祭のお小使がたくさんもらへる。お祭には盛中のポツポ船が、桃を

つんだやうにして、はこんでくれる。

菊かり、麥かりと雨の來ぬうちにすまされて、鯉のぼりが大きな口に風をのみこんで、尾をばたつかす頃から魚がつれはじめる。

ギザミ、ウナギとへうたん沖から四十島の沖合では面白い程つれる。つゆが梅の實をうれさす頃は、バレー、ドッヂ、バスケットは出來ないが、三戸や口の谷の池は一ぱいになつて、村は田植で戰爭の樣にいそがしい。なへとり、子守、たばこのねよせとなか〳〵子供にも一仕事ある。虫をとりに行くのもこの頃だ。先生につれられてはじめのうちこそまじめにとつてゐるが、かにを追つたり、蛇をみつけたりするうちに遊ぶ方にみが入つて、お百姓のをいさんから、どなられたりする串もある。

ほたるを取りに行つて、たんぼへおちこんで時ならぬ水泳をやるのもこの頃だ。

そのうちに海水浴がゆるされる。學校は大方午前中にすむので、大いそぎで海へ行つて、魚つりおよぎと、はだかで遊ぶ。オコゼにさゝれて半日中ないたり、はとのさきからとびこんで腹をうつて泣顏をしたりする。

かへつて食べる西瓜の味は又かくべつだ。お盆は大てい夏休中にある。お月樣が丸くなると青年がをどりばで「ドンドコ」「ドンドコ」と大鼓をたゝく。月がかたむくまで

「エートサエートサア」

とをどるが、子供は、へんさうしてをどり子に出たり、新しいせんすで友達の頭をパチンとたゝいてにげたりして遊ぶのだ。

二百十日もこゝなくすむと、お祭だ。宮出、宮入はあるが、近年あんまり面白い事のなくなつたのは、何だか子供には淋しい。

お祭も面白いが運動會は面白い。たのしくがくたいにあはせて、こほ、つな

ひき、お父さんお母さん兄さん姉さんに

「ヤレヤレ」

とおうゐんせられて走る。一等になるも、ドベコツになるも共に面白い。

村名物のいちじくがなくなると麥まき、いもほりこまたせはしくなつて來る。そのうちにこころ〴〵にある、みかんが色づくころはしぐれがあはたゞしい渡り鳥の聲と共に來て、山々のもみぢを色づかす。三學期には、また手工のてんらん會でいそがしい思をする。

二五　盛口村

一　地勢

我が盛口村は大三島の北東岸にあつて、高さ三百メートルに餘る急な山脈が南北に走つて鏡、宮浦、瀬戸崎の三村の境をしてゐる。さやの峠で其の山脈が一たんきれて低くなつてゐる。沖のへうたん島は廣島縣である。

海岸から山脈までは遠い所が多くて、傾斜がゆるやかだから、其の間にたくさんの田畑がある。小さい岡があつたり、低い山が海岸にせまつてゐる所もある。井口には大きな川が二つあつて山から流れ出た砂で川底が家の屋根よりもはるかに高い。此の二つの川の間には島に珍しい廣い田がある。盛にはこんな川はないが、山ずそから廣い畠が海岸まで續いてゐる。

二　産業

我が村には田百四十四町、畑三百二十三町、大部分は農業で其の主な産物は（昭和五年）

米　六萬參千五百圓

麥　參萬參千圓

煙草　六萬圓
除虫菊　貳萬八千圓

位で其の他蜜柑の産額も年々増してゐる。

地味はよく殊に盛の東部の畑は廣くて肥えてゐるから、どんな作物でもよく出來る。

井口の田は段々が少くて廣いので、耕作するにはよいが、低地であるから麥の耕作には不便な所が多い。

盛の方は段々が多くてよくかわくから、麥を作るにはよいが、少し日照がする年には米の産額が大變に少くなる。

三　住　居

盛は墓山と、寺屋敷龍王等の山ふところの地に三百二十戸が一かたまりになつてゐるから、共同の生活をするのには大變便利である。

井口の方では五百五十戸程が里、森側、井口、院主、好味、戸板部落になつて散在してゐるので、學校へでも辨當を持つて來なければならぬ者が少しはある。

それであるから盛の人達は田畑へ往復するのに、大變な時間をついやさなければならぬが、井口の方ではその樣なことは少い。

四　交　通

井口の方では、宮浦から戸板までは立派な縣道が通つてゐるが、外の道路はあまりよくない。それに盛へ通ずる道もわるくて、自轉車などでも三分の一以上まで押さねばならぬ。縣道が全通したら瀬戸崎へ行くのも、宮浦同樣便利になる。盛では青年會場を中心に、東西へは約二キロメートルづゝ、海岸から山手へは約一キロメートル、よい道がついてゐる。しかしまだ〳〵よくせねばならぬ所が澤山ある。

海上には津島丸、南生口丸、昭和丸、瀬戸崎丸などがあつて、尾道、今治、忠海方面へは大變便利である。

この外盛には發動船が忠海へ毎日航海してゐるので、農産物を賣つたり色々の品物を買ふのに便利である。

もくじ

一　大三島……一
二　私は倉庫です……七
三　麓常三郎……一三
四　はねつるべ……一八
五　用水池……二三
六　煙草と除虫菊……三一
七　蠅と蚊……三五
八　弓祈禱……三八
九　信徳舍……四一
一〇　年頭の禮……四四

もくじ

一一　學校……四七
一二　さかりかたぎ……五一
一三　光圓和尚……五五
一四　庄屋屋敷……六〇
一五　進取の氣象……六五
一六　芋地藏廻國日記抄……七一
一七　高野さん……七六
一八　菅原長好……七九
一九　日露戰爭……八三
口繪　山から見た村
大三島地圖
越智郡島嶼部地圖

一　大三島

一　位置

大三島は瀬戸内海にあつて、四國高縄半島の北端と中國地方の忠海能地の間にはさまれ、東は鼻栗瀬戸をへだてゝ伯方島に接せんとし、西は大崎島に相對してゐる。

二　村と學校

村	人口	小學校	學級
盛口村（盛、井の口）	四九五九	井の口	一二
		盛	八
瀬戸崎村（瀬戸、甘崎）	三三〇〇	瀬戸崎	一二

鏡村	（肥海、大見、明日）	二六二一	鏡 八
			明日分校 三
宮浦村	（宮浦、臺）	三五六一	宮浦 一一
岡山村	（口總、野々江、宗方、浦戸）	六二八三	岡山 八
			口總 八
			宗方 八

三　地　勢

島の中央には、四百三十八米の鷲頭（わしがだけ）を主峰とする三四百米の山脈が走つて、さやの峠と岡山村の阪に通ずる低地とで大体、島が三つの高い部分になつてゐる。平地は少く僅に井の口と宮浦にあるばかりである。海岸は出入少く、西には鏡の鼻、御串、岡山の半島があつて二つの横島を抱いてゐる。

川は井の口と宮浦、臺（うてな）にあるが何れも土砂を澤山流したので川底が高くなつて交通に不便である。それで先年宮浦では川底をトンネルにして大山祇神社へ參拜する人達にも便利な樣にした。山が淺いから大雨が降るとすぐ水が流れるが、川口まで流れるのは年に二三回である。

四　産　業

大三島は、土地が狹くて山が高いから畑が多い。

	田	畑
瀨戸崎村	七七町	二一〇町
宮浦村	八一町	一五三町
鏡村	四四町	二五四町
岡山村	九九町	四〇七町
盛口村	一四四町	三二二町
計	四四五町	一三四六町

それであるから、除虫菊、煙草、柑橘の栽培が盛に行はれる。殊に柑橘は、階段の地と空氣が乾いてゐるのを好むので、大三島には最も適してゐる。それで年々其産額を増し、殊に鏡村などでは共同選果場を設け、出荷組合をつくつて盛んに賣出してゐる。

宮浦の新地は、小さい町で、大三島の中心都市とも言ふべきで、各種の商店が軒を並べてゐる。然し交通が不便で中心都市としての十分の用をなさないから餘り發展しない。それでむしろ大山祇神社の參拜客を相手にしての商賣の方が榮えてゐる。其の他の村では、小さい商店があつて日用品を販賣してゐる。

五　交　通

岡山村では、二十年程前から宗方、口總、野々江、阪の部落を連らねた立派な道路が出來てゐる。

瀬戸崎村でも瀬戸、甘崎、大原を結ぶ幹線が通じてゐる。

鏡村では、三部落を連らねた縣道が宮浦村に連絡し、海岸では傾斜がないから便利である。

我が盛口村では、井の口、宮浦間は立派に結ばれながら、大事な盛、井の口の兩部落がきり離されてゐる事は誠に殘念である。

岡山、宮浦、盛口、瀬戸崎、更に盛口、鏡の各村が互に立派な道路で連絡される樣になつたら陸上の交通は便利となる。

海の交通は、誠に便利で、今治、宇品間、今治、竹原間等の連絡の船は、西側の大抵の部落に着ける。

更に高濱、尾道間の連絡船相生丸が、大山祇神社のために特に宮浦に寄港するなど、西側の人達は惠まれてゐる。

東側の二村は、やゝ劣つてゐるが、近頃は澤山の發動船が寄港するので昔の不便は夢と消えてしまつた。

六　村落

大三島の部落は、密集してゐるのが多い。これは徳川時代までは政治が海上へ充分に及ばなかつたので、海賊に時々やられてゐたから密集して其難を逃れたのであらう。

明治の御代になつてから野々江阪、小口、宗方阪、下阪と南部の耕地へは次第に移住分散して來たが、盛だけは分散すべき狀態にありながら、田原さんが二十年前に移住したきり、誰一人行かうとしない。

狹い土地に大勢の人が住んでゐるから土地は開けるだけ開いた。特に明日、大見の如きは「あんな所へ」と言ふまでに畑をこしらへてゐる。たゞ我が盛口村だけは土地に惠まれてゐるためまだ開ける所もそのまゝになつてゐるので、近頃大長の人達が盛の西の方を果樹栽培のため次々と開墾してゐる事は注意すべきことである。

大三島は、こんなに開墾してきたが、それでも澤山の人口は支へられない樣になり、世が進んで色々の職業が増して來たので、出稼する人達が多くなつた。それで、農業は老人や子供にまかして置いて、年中働きに出る人も段々多くなつた。例へば井口の石工や、宮浦の大工はそれである。或は岡山村の酒屋行きのやうに季節的に移住して、一家の生計を助ける人達も出來てきた。其他船乘、行商、工場行と島をはなれて生活の道を求める人達も追々增した。

二　私は倉庫です

「大きな倉ぢや。あゝ、農業倉庫か、立派なものだ。」

今日も三べん聞いた。船で海を通る人、或は一歩村に踏み込んだ誰でもが、一番先に私をほめてくれる。この聲を聞き初めた頃は、もつと脊を高くし、肩

をはつて見たいやうに思つてゐた。私が盛の誇の一つだと堅く信じて。しかし、今ではこの聲を耳にするのが嫌になつた。嫌と言ふよりつらくなつた。出來ることなら、餘り人目にたゝぬやう小さくなつてゐたいとさへ思つてゐる。何故かて、まあ聞いて下さい。

島でも、伯方島や大島に行けば私の仲間が二三人居るが、五箇村、十三部落のこの島では、私が唯一人、盛の海岸にそびえ立つてゐるだけです。我が盛部落では、体の大きさから言つて、寺と學校の外、私に近寄るものはない。いや大きさだけではない、丈夫な点からも私の右に出るものはない。見る人毎がほめるのに何の不思議があらう。誠にもつともな話である。

村長さんや、組合の役員の方や、皆樣のお世話で、愛媛縣から參千圓、お隣の池田さんから壹千圓、それに組合員の方々から更に壹千數百圓のお金と多大の勞力奉仕があつて、昭和五年四月廿五日私は立派な農業倉庫として生れて來

た。アーチがつくられ、万國旗が張り廻され、酒がくまれて、にぎやかに祝つて貰つたのです。

さて皆さん、何のために私は生れて來たのでせう。私の役目は何でせう。それは私の名前からして大抵は想像がつきませう。お父さん、お母さんから皆さんまで、精一ぱいに働いて作られたお米や、お麥や、除虫菊を皆さんの家から預るのが私の仕事です。

靜かな盛の里に、勇ましく發動機の爆音がして、麥摺がすむと、皆さんの家に俵の山が築かれる。土間の狹くなる家があり、お座敷の暗くなる家も出來、暑い夏の晝休にそよ風の通さぬ家も出來るでせう。涼しい秋風が訪れて、田圃に黄金の波を見る頃、やつとこの山が崩れたかと思ふと、又勇ましい籾摺が行はれる。今度の山はお麥の山よりまだ高い。家の中は狹くなり、曇り勝な冬の日に家の中はうす暗くなる。こんなきゆうくつさや、いんきさも、俵の山があ

ればこそと思へば我慢出來ぬことはない。今日までそれですんで來た。ところが俵の山と見て喜んでゐる中に、あのいたづらなねずみは丈夫な俵に穴をあけて、貴い汗の結晶を失敬する。大切な賣物に傷をつける。いたづら者のねずみは、猫君に恐れいるが、まだ穀象蟲や穀蛾の輩が晝夜休なしに、天下の寶、人間樣の食料を貪り食つてゐる。彼等はなりこそ小さいが、多勢の猛威、うつかりしてゐる間に、俵の山を臺なしにすることがある。一俵で六リツトルや、七リツトルの米麥を食ひつぶすのは普通のことだ。

今假に一つの俵で二リツトルづゝ食はれるとして、盛中では麥八十俵、米百俵、お金にして六七百圓にもなる。勿体ないことではありませんか。貴い食料がこの損害を受けぬやう、且は、皆さんの家で俵の山が邪魔にならぬ樣に、私がお預りするのです。この私が預つた限りは全く骨折らずに、ひどい毒瓦斯でくんじようし、米一粒麥半粒もへらさないで、何時でもお返しする。これが

私の役目です。仕事です。尙その上、皆さんのお父さんが納稅だ賴母子だ、お金がいると言ふとき私の預つてゐるお米か、お麥が安ければ無理にその時賣らないでも、組合でお金を借りて、値が上つた時賣ることも出來る。

私は誕生を祝つて貰つた翌日から、麥摺は直だ。早速御奉公が出來ると力んでゐた。ところが案外、麥摺がすむと相變らず俵の山は多く皆さんの家に積まれて、私が預つたのは僅であつた。いや、今忙しいから田植が終ればと思つてゐた。意外農休が過ぎても、私の懷は淋しかつた。稻が伸びて田圃のはね木が忙しくなる頃から、穀象虫等が猛威を振ひ出した。猫の油斷を見てはねずみもいたづらをする。私は居ても立つてもをれぬやうに思つたが、くやしいことに一歩も動けぬ。やがて盛名物のいちじくの葉も散り果てた頃、籾すりが始まつた今度こそは大切なお米だ。夜の目もふさがず水を汲んで作られた貴いお米だ。きつと私に預らせて下さると待つてゐた。だん〳〵お米の檢査はすんだ樣子だ

が、不思議に米俵はこない。舊のお正月がきても、土間や板間に澤山のお米が積まれてゐる。私は張合がぬけた。皆樣への御奉公がしたくてたまらぬ。私にどうして存分な仕事がさしてもらへぬであらう。

退屈な一年は過ぎて、二度目の秋を迎へた。私の氣持を汲んで下さつた組合の役員方は、無賃で組合員に奉仕せよと申された。働きたい一ぱいの私は喜んで一錢の報酬も頂かず、預らせてもらふことにした。

去年に比べると少々多かつた。現在預つてゐるのが六百俵程だがまだ私にはもの足りない。この上どうしたら十分な御奉公が出來るかと思案にくれたが、妙案もない。一歩も動けぬ私には、皆さんの家まで預りに行くことは出來ぬ。ちつと氣長に待つてゐなければならぬ。

誕生の祝の時、郡の村瀨の小父さんは、皆さんのお父さん達に「倉庫を存分に利用せよ」と言はれた筈です。どうか、私に十分仕事をさせて下さい。

三　麓常三郎氏

「寺は金持、麓は地持、脇の美いさん息子持。」

今も民謠に殘る麓は、木綿會社を今治市に移してからは、大正七八年の好景氣に出合つて面白い程利益を得て、忽ち大金持になつた。又大正十二年の縣會改選には、今の代議士村上紋四郎氏と戰ひ、見事勝ち得て縣會議員の榮職につく事が出來た。實に氏は我が盛の生んだ縣會開設以來大三島唯一の縣會議員であつた。

豫想の出來ないのは人の運命である。突然不景氣の風が日本中を吹きまくつた。さしもの常三郎氏もこの風だけはどうする事も出來ない。年一年日一日と家は傾いて、昭和元年の縣會選擧には、再び候補者に立つ金はなかつた。それ

でも會社は缺損に缺損を續けながらも、今に景氣が出たら、とそれのみをあてに命からゞ運轉を續けてゐたのである。

然し好景氣は再び來なかつた。今まで借金に借金を積んでやつと運轉を續けて來た會社も、昭和三年に至つて、終に二進も三進も動けなくなり、こゝにさしもの大會社も倒れてしまつたのである。巨万の金も、廣い田地も、たうてい大借金の穴をつぶす事は出來なかつた。かうして「地持」の麓は、今や麥一粒まく畑も失ひ、「金持」の麓は明日食ふ米をさへ心配しなければならなくなつた。薄情なのは人の心である。昨日までは氏にへつらうた誰彼も、今日となつては最早見向きもしなくなつた。

今治停車場は・市の表玄關である。大通の兩側には今治名物や、食堂の大看板をかけた二階三階の美しい建物がづらりと並んでゐる。其の左側の大建物の

間に、唯一軒みすぼらしい平家がはさまつてゐて、表に「腹力まんぢゆう」と大書した古い障子がたてかけてある。それは今治市の表玄關には似つかぬ貧弱な物であつた。

昭和四年五月の或る夜更まだ起きてゐるのだらう、家の中からまんぢゆうの臭と共に小さな話聲が聞えて來る。

「まだ若いお前に苦勞ばかりかけて……それがなう。」

「又お父さん其の話ですか。もう止めませう。僕はお父さんとかうして一緒に働けるのが一番樂しみです。」

「お前にさう言はれると、わしは尙つらいのだ。」

しばらく沈默が續いて、

「然しわしはこのまゝ死にたくはない。きつとこの腕で、もう一度花を咲かせるのだ。わしはわしの腕を信じてゐる、其の時はお前にも喜んでもらはう。」

「さうです。僕はお父さんのえらい所を知つてゐる。きつと成功します。僕はお父さんの意氣を、忍耐を、人格を信用してゐる。お父さんもう一度出なほすのです。」

「さうだ。縣會議員もまんぢゆう屋も同じ樣に神から與へられた尊い仕事だ。お前の爲にだつてもう一旗上げずにおくものか。」

あたりは恐ろしい程靜かな眞夜中だ。

「おや、もう二時だ。明日の仕事につかへるからぼち〳〵寢よう。障子でも入れようか。」と表戸を開けて出て來たのは姿こそ變つてをれ、たしかに我等の麓常三郎氏だつた。

氏は金からも、名譽からも見放されたけれども、決して落膽はしなかつた。大きな自信と、信念に燃えてゐた氏は、息子八郎君と共に、驛前で「腹力まんぢゆう」屋を始めたのであつた。かつて習つた宮浦まんぢゆう製法が役立つたのだ。昨日までの社長が、今日は平氣でアツシを着こみ、自ら自轉車をあやつつて賣つて廻つた。舊知の人に出會つても平然たるものだつた。內に信念あればこそだ。我等は、讀本九で習つた「精米會社の老社長」をこの人に見る事が出來る。雨の日も風の日も決して氏の仕事は、かけなかつた。氏の出られない時には、若い八郎君が出た。一人はきつと店に殘つてゐて驛に集る人々に賣り、朝は早くから夜はおそくまで働いた。正直と安價と美味とは段々人々の間に評判になり、まんぢゆうはごし〳〵賣れて行つた。親子の願ふ日は案外早く來るのではなからうか。

ごこまでもわからないのは人の運命である。二度目の成功を目の前にひかへながら、氏は終に昭和四年八月二十六日此の世を去つた。年六十二歲。思ふ成

功は得られなかつた。然し山のてつぺんから千仞の谷底に落ちこんだ氏が、自暴なく、自棄なく、再び勇ましく希望に向つて突進した自信と勤勉は、我等の手本にする事が出來る。

四　はねつるべ

田植がすんで、家の者が樂しく夕飯を食べてゐた時、

「健治、お前も五年になつたのだから、今年から水汲を手傳つてくれ。」

と、おつしやつた。私はやつと半人前になれたと思つて

「一生懸命やりますよ。」

と喜んで返事をしました。

今其の水汲の眞最中です。田植から雨らしい雨が降らない。稻が枯れてしまひさうなので、毎日々々お父さんとお母さんが死者狂で水汲をしてゐます。

私は學校へ行かねばならないので、思ふ樣にお手傳が出來ないのが一番殘念です。一昨日の晩

「明日は日曜ですから、まる一日、一生懸命汲みますよ。お父さんが起きたらすぐ起して下さい。」

とお賴みして床にはいりました。

少しうと〳〵したと思ふと

「健治！健治！」

と聲がします。目を開いて見ると

「さあ水汲に行くぞ。」

お父さんは早庭に立つてゐました。私は急いで飛び起き、用意しておいたバケツをさげて表に出ました。お父さんとお母さんにはさまつて、暗い道を急い

でゐると、もう其處此處で、ぎい〳〵とはね木の音がしてゐます。

「お父さん、何時頃でせう。」

「まだ二時頃だ。そら、一番雞がないてるだらう。」

「ずゐ分早いんですね。昨夜の十時頃まで働いたお母さんやお父さんは、こてもおつかれでせう。」

「なあに働くのが百姓だ。大池や川のない盛の百姓は、それだけ他村よりも澤山働かなければならないのだ。他所の村では、ねてゐる間に自然と田に水が入るのだから。」

「三戸の池では駄目ですね。」

「三戸ももつと水がたまる樣にないと駄目だね。」

こんなに話しながらも足は急いで、三十分もしてやつと田につきました。

上の田にお父さん、下の田にお母さん、私は眞中の小さい田のはね木にバケツを結びつけて、ぐん〳〵おろしては引き上げ、ざあつと田に水を流します。ぎい〳〵、一つるべ二つるべ——此の私の小さい二本の腕でどれだけ稻が生き返るでせう。考へると働くのはとても愉快です。

然し、六十七十と數へて行く内に、次第に腕がだるくなつて來ました。まだ一枚の田もすまないのです。

その内に、今度はお腰の力がぬけて、思ふ樣に動かなくなりました。まだ夜も明けないのです。

あゝ、今日一日中働いたら、夕方にはどんなにつかれるだらう。然し、お父さんやお母さんは明日も、明後日も、一週間も、一月も同じ事を繰り返さなければならないのだ。私の今日一日位の仕事がなんだらう。かう思つて、精を出してみても、しばらくすると又体中が重くなつて來る。

「さうだ。どうせ他所村の樣に水がないのだから水汲をせねば稻が枯れてし

まふのだ。然し文明の進んだ今日、もつと外の方法はないであらうか。學校の様なポンプから色々工夫でもして、新しい機械でも發明したら、どんなに盛の百姓は助かるだらう。そして餘つた時間で外の事をしたら立派な事が出來るのに……」

機械の様に手を動かしながらこの話をすると、お父さんは

「えらい事を考へたね。お前がお父さんの様になる頃には、きつとさうなるだらう。然し今どんなに難儀をしても、すればする程、秋が來て黄金色にうれた稻を見たらこれほどうれしいものはないよ。神様がお父さんらの働にごはうびを下さるのだからね。」

とおつしやつた。

こんなにして、やつと一枚の田を終へて、朝飯を食べに歸りました。

五. 用水池

今から八十年程前のことである。

二三年の日照に苦しんだ村人達は、今年こそ都合よく雨が降つて下されば よいがと祈りながら、にぎやかな歌聲と共に田植をすました。一番草を取る頃までは水もあつて稻も青々とのんでゐたが、それから毎日天氣がつゞいて、引く水もなくなつてしまつた。

人々の顔には不安の色がみなぎつて來た。毎日天を眺めては、ため息をつくばかりであつた。

天は人の苦しみ等まるで何でも無いことのやうに、毎日からりと晴れて、暑い日ばかりがつゞいた。雲が出た、と喜んでも、それはそ知らぬ顔をしていつ

の間にか無くなつてしまふ。穂の出る頃になつても、花の開く頃になつても、雨は降らない。今年も亦米はこれなかつた。人々は力のない眼で田を見守つてゐる。

作方富助は、毎年この様子を見るに見かねた。

「さうだ、やつぱり池を掘らなければならない。」

と快心をした。

彼は日頃から此の口總村をかんばつの厄から救ひ、尙將來新に田をつくり、此の我が村を發展さすためには、池を築くことが最も大切なことであると共に、最も急務であると考へ谷といふ谷、泉といふ泉は殆ど見廻つて、何處へ池を築くことが最も便利であるかをしらべた。

彼は村民をあつめて池を築くことの必要を說いた。若し池を築くことが出來るものであり、費用のかゝらぬものであるならば、誰だつて賛成しない者はな

いのだつた。

事實、村民の誰もが此の二三年來水の無いためにどれほど苦しまされたことか、殊に今年の傷は、まだ新しかつた。せめて、もつと大きい池が一つでもあつてくれたら、むざ〳〵あの稻を全部枯らさなくてもすんだであらうとは、誰もが思ふことであつた。池は欲しい。けれどもそれを築くことの苦勞と、多くの費用を思ふ時、村人達はしりごみをした。

しかしそれは、もうしりごみなどする時ではない。作方富助は既に十分の心構を持つてゐる。斷行の時である。彼はどんな反對があつても負けてはならぬと思つた。

それだけに彼の考と說明とには力があつた。村人達の中には多少反對したものもあつたが、彼の熱意には反對することは出來なかつた。村百年の大計には、眼先の慾は敵することは出來ない。いよ〳〵築くことに決つた。

二年も三年も前から、谷こいふ谷をしらべて廻つて、おこの地を最適と考へた。それからは殆ど毎日のやうに、そこに行つてその邊を歩き廻つた。彼の心には池を築くことより外には何物もなかつた。村をあげての大工事、若し設計にくるひでもあつて不成功に終ることがあれば、何こして村人達に申わけが出來よう。彼は考の上に尙考へ、精密な設計を立てた。

いよ〳〵工事は始まつた。ふみしめ、たゝきしめられた堅固な一直線の土手は五谷も六谷もから流れ出る水をよくくひ止めて、滿々こたゝへてくれるに違ひない。工事が進むにつれて、人々はこの仕事が樂しくなり自然土を運ぶ肩にも力が入り、ふみしめる足にも力が入つた。かうして工事は賑(にぎや)かな掛聲や笑聲の中にはかどつた。

彼は嬉しくてたまらない。日が暮れて人々が皆歸つた後で、時間のたつのも知らず土手の眞中へ坐つて、墨繪の樣なあたりの山や谷を見ながら動かなかつ

た事もあり、夜の明けるのが待ちきれなくて、暗やみの中を、夜つゆにしめつた土手を歩き廻つたこともあつたが、彼は決して喜に心を奪はれなかつた。たこへ如何なる困難がおしよせようこも、是を成就(じやうじゆ)させなければならないこいふ大決心が放れなかつた。

工事は人々の思つたよりも容易に進んで行つた。が村人達はあきやすい。初の中は土も石も極近所から運べたのであるが、段々遠方から寄せて來なければならなくなり、三ケ月四ケ月の働がまだ全体の一割にも足りないことを見た時、人々は漸くこの仕事にあきて來た。費用も澤山要る。田畠の仕事もいそがしくなつて來る。ぼつ〳〵不平の聲も起つた。出來るか出來ないかわかりもしない工事に、多くの費用と、多くの手間をかけることをいこふ樣になつた。

けれども、富助の決心はやはり動かない。一年こたち、一年半こかゝつて、半分位出來上り、人々はごうやら此の工事に見當がついたので不平の聲も追々

少くなり、又仕事に力が入つた。ところが、その年の梅雨に入つて、近年にない長雨が降つた。濁つた水がどん〳〵流れ落ちて半分程出來上つた池にたまり土手は刻々水に浸つて餘す所尺となり、寸となつた。彼は自已の設計に十分の自信を持つてゐたが、まだ十分に固らない中に此の長雨では不安で、天に向つて祈る外はない。しかし天は彼の不安にも、祈にも、何の同情もないやうに雨は止まなかつた。

人々の顔にも不安の色がみなぎつてきた。彼はそれを見るのがたまらなかつた。一年半の努力のかたまり、それがたゞ一時の間に流される樣なことがあつては！

併し〳〵それは遂に來た。すさまじい音と共に土手は切れた。流された。何と言ふつうれつなひあいであらう。彼は土手と共に死にたいと思つた。が地の底からひゞいて來る樣な物すごい音を聞いた時、彼は來るべきものが來たと思

ふと同時に、

「やるんだ。」「やるんだ。」「何回でもやるんだ。」「やり直すんだ。」

彼はかへつて晴々した氣持で勇ましく歸つた。

「設計が悪いんだ。」「つまらぬ事を言ひ出して村はどれだけの損か。」

悪口は村中に起つた。それ等村人達の立腹を無理とは思はない。けれども今此所で少しの弱味も見せてはならぬ。どんなに反對したつてやらさずに置くものか。彼は作方と言ふ役目の權力を振り廻し、再び工事に着手することに決めてしまつた。村中の人は彼の敵であつた。

「若し、此のくはだてが再び不成功に終るやうなことがあつたら、村への申わけの爲に命は捨てなければならない。命こそ惜しくはないが、この池を成就させずに死ぬことは如何にも殘念だ。」

彼は人知れず悲壯な決心を固めた。

「今まで無くてすんだものだ。」

「出來ることも、出來ないこともわからない仕事だ。こんな工事をやれ〳〵と言ふやつは、一しよに生き埋めにしてやれ。」

「又崩れるかも知れん、築いては崩れ、築いては崩れしてゐる中に、村はつぶれてしまふわい。村つぶしだ。」

かうした悪口は親類の人々からさへ聞くのであつた。

「悪口を言つて氣がすむなら、どんなにでも言つてくれ。池さへ出來たらきつと笑つてもらへるんだ。喜んでもらへるんだ。」

彼はむしろ悪口を言はれることによつて心安さをおぼへるのであつた。

しかし妻や子供は話し相手も、遊び友達もなく、さびしい悲しい思に幾度も泣いた。夫に向ひ父に向つて此の工事を思ひ止つてくれと訴へた。

「おれの爲にお前達にまでつまらない思をさして氣の毒だ。だが村の爲だ。何事も我慢してくれ。なる程今こそみんな悪口を言つてゐる。おれをにくんでゐる。併し池さへ出來たらみんな喜んでくれる。友達がないのは淋しいだらう。悪口言はれるのもつらいだらう。だがすべて村の爲だ。我慢してくれ。」と靜かになぐさめるのであつた。

彼は又、村の費用を輕くする爲に、多數の石工のまかなひ等に私財を出すことが多く、妻は爲に苦しい思をした。

悪口にもめげぬ決心、自分の財産をなげ出してまで村の爲につくす熱心には、村人の心は動いた。よろこんで仕事にいそしむ樣になり、工事は着々としてはこばれ、さしもの大工事も四年の後、安政六年に至つて完成した。

六　煙草と除蟲菊

一　煙　草

煙草は、今日この村の重要作物の一つとして、村人達から手放すことの出來ない程大切なものである。

これはアメリカの原産で、ヨーロッパを經て、慶長年間日本に傳はり、年と共に各地に廣がつた。近年其の栽培の盛んな地は、鹿兒島縣、栃木縣、茨城縣で、我が愛媛縣は全國の十三位で、其の價格實に百五万余圓である。

この煙草が盛口村に作られる樣になつたのは大正二年で、同年參千五百余圓、それが大正六年には壹萬圓、昭和三年には七萬五千圓の收益を得て、米に次ぐ重要作物となつた。

この煙草栽培の當初のことである。以前から村の重立つた人達は、この村の産業を何とかしなければならないと、何時も考へてゐた。そこへ煙草栽培の非常に有利なことを聞き、色々調査し、この村にも煙草の出來ないことは無いと

確信し、骨折つて煙草栽培の許可を得た。しかし村の人々は今の樣に煙草の有難さは夢にも知らず、仲々取り合つてくれない。重立つた人達は色々と心配をした結果、各組に割りあて、どうしても作らなければならないことにした。義理固い村人達はかうなればどうしても作らなければならぬ。こんなことで、私の村にも煙草の栽培が始まつた。

しかし、今迄作つてゐた米や麥の樣には行かない。苗を育てるにも非常な手數がいる。大きくなれば虫も取らねばならず、芽も摘まねばならない。をさめるまでの勞力は非常なもので、いやがられたものだ。

こころがをさめて見ると案外澤山の收入があつた。かうしたことが一年、二年とつゞいて、煙草は良いものだと言ふことがわかつたのである。

二　除　虫　菊

梅雨晴の初夏に、雪とあざむき、靜かなる我が村里を飾るもの、これこそ村

の重要物産、除虫菊の花である。殊に初夏の夕日をあびた姿は何ともたとへやうがない。

此の除虫菊が初めて我等の盛に栽培せられたのは、大正の初期であつた。その當時、既に高根島では盛んに栽培せられてゐた。我が村の人達は、その多くの收益あるを見ながら、その收穫期に入ると雇はれて行つて僅かの賃錢を得て喜んでゐたものだ。村の人達の中には

「食べられる物でなければ」

こんな考が中々頭から離れなかつた。僅かばかり栽培してゐた人達も笑ひ草になるの狀態であつた。

ところが、笑ひ草の除虫菊は、麥に數倍する賣り上を見せた。笑の聲はかげをひそめ、菊畠は年一年廣まつて來たのである。

七　蠅と蚊

蠅「君は一体何處から來たのかね。」

蚊「僕はこの家の台所の裏にある水溜から來たのだ。僕等の仲間は大方あそこから來る。僕等の住むのにはとても都合が好い所だ。今日は少し御馳走が欲しくなつたので此處まで來た。」

蠅「君の一番御馳走は、」

蚊「それは何と言つても人間の血だ。これ位うまいものは無い。見給へ、此の鋸と羽を。これさへあれば人間の血を吸ふ位朝飯前だ。」

蠅「所が僕にも容易ならぬことがある。それは煙だ。この邊の家には煙出が無なぜ、蚊は自慢さうに話し出した。

いので、火を焚かれると、目も口も開けられたものではない。」

蠅「そんな時に自慢の羽で飛び出せばよいではないか。」

蚊「それだ。僕にはかうした立派な羽はあるが、逃げ場所が無い。家の圍は厚い壁でとぢこめられてゐるので、そんな時には仕方が無いから床下に行くのだ。床下へ行けば安全地帯だから。」

蠅「君ものんきにはしてゐられない樣だね。僕達の仲間は何でも食べるから、君達の樣に危險な所に行かなくとも、御馳走はいくらでもある。緣の下を見給へ。大きなつぼがあるだらう。そこへ行けば僕達の食べるものはざらにあるんだ。其の足で台所へも行く。」

蚊はうらやましさうに

蚊「君、君、君達だつて人間の奴に困らされることがあるだらう。」

蠅「あるとも、僕等も中々油斷は出來ない。ついうつかりしてゐると、あれだ、

あの隅にころがつてゐる蠅たゝきでたゝかれる。今もね、此の向ふを飛んでゐると仲間のものが大勢集つて騷いでゐるではないか。近よつて見るとみんなのものが足をとられて困つてゐる。實に可愛さうで見られなかつた。僕も危險だとは思つたが、仲間を助けようと、おそる〳〵近よつて前足を踏みこんで見たが、とてもよくひつゝく。命を取られる所だつた。先日もこの眼を牛の尻尾でなぐられ今日もまだ少しかすんでならない。」

この時何處からか人間の匂がして來た。腹のすいた蚊はたまらなくなつて

蚊「おい蠅君、腹がすいてべこ〳〵だ。話は又にして腹ごしらへをしようではないか。」

二匹は羽音高く空中を飛行した。天井が無いので飛行は自由に出來たが、所々にくもの巣がある。蚊は隣室に寢てゐる赤ん坊を見つけた。

蚊「おい蠅君、よいものを見つけ

と、のこぎりを出して、顔をやぶり、血を吸ひ始めた。蠅は蚊の後を追つて赤ん坊の顔におり、鼻の下、口もと、所きらはずなめつくした。

八弓祈禱

舊正月に行はれる行事に、弓祈禱といふのがあつた。誠に古風な儀式でいとも莊嚴に行はれたものである。

先づ三日に、神社に於て祈禱があり、日取の抽籤が行はれて、七、八、九日のいづれかの日に決定される。同日十二人の射手と、二人の矢拾も選ばれる。それ等の人は翌日から他の人々と共食交遊を絶ち、毎朝水ごりに身を清めて、神社に參拜し、晝は宿元にて弓の練習、夜は遲くまで年寄衆を訪問して儀禮を授かるのである。

當日になると、五つ紋のあはせに、麻裃、新しい草履で宿元を出て行く。宿元は昔から上と岡の二組に分かれてをり、各々二軒宛あつて、差支のない一軒があてられ、練習其他集合の場所となつてゐた。途中竹の下川口で弓と矢の尖を海水に清め神社に參拜し、こゝで勢揃して射場に赴くのである。

射場には十二人の射手が一列に並べるだけ砂をまき、其の上に新ごもをしいてゐて、前方十二間位の處に的が置かれ、後方三四間の所に神主さんの座が設けられる。

いよ〳〵儀式が始まると、射手は一樣に片肌ぬいで用意をする。一番の射手が射ると丁寧に會釋をする。二番三番の射手と順次に終る。しかし多くはばら矢というて用意の出來た者から射るのである。一人が三十回で終る。これは大的で徑一丈位のものを使用する。續いて小的にかゝる。それは徑三尺、一人が三回で終る。お願等ある時は其の人の爲に又行はれるのである。見物人は、村

の人ばかりでない、里、井口、肥海、大見方面からも多く來てゐた。

晩には當元に招かれるが、そこまで澤山の人が押しかける。この饗宴こそ大切な儀式で、我が盛で古來やかましく言はれてをる小笠原流の作法を、最も嚴格に適用するのであつて、小笠原流の料理を前に箸のつけ方、盃の一つ〳〵にも中々の挨拶を要するので、見物人は見事やり遂げるかどせき拂一つするものもない。

終ると宿元に歸り、年寄衆の御援助により首尾よく宮元、當元の儀式を終へることの出來た御禮の言上、それから二本の矢と灯提を持つて親類へ花の廻禮最後に、自宅に歸り父老にていちような挨拶を述べる。これで總ての儀式は終り、宿元に引き下つて裃を取るのである。

後日初射手が射手と親類緣者を招く。これを花開といつてゐる。

九信德舍

今年の五月上旬の事である。水曜日の放課後何時もの通り、をつさんの話を聽かしてもらふために、西光寺の門をくゞつた。信德舍の人に敎へられて奥の新しい座敷に通つた。和尙さんの書齋へはいると、一人の青年の先客があつた。

「やあ」と私の挨拶に答へられた和尙さんはすぐに、

「前に舍にゐた岡山縣の齋藤君です」

と紹介された。私は

「盛校の敎員です」

と挨拶をした。此の頃の青年は一寸隣村まで出かけるにも、セルの羽織位は着るのに、この青年はアツシを着てゐる。私はその服裝に心を打たれた。この一

事で前に舍にゐたといふこの方の精神がわかるやうに思つた。

青年が座を立つてから、和尚さんは茶を入れながら話された。

「妙だね。不思議にあつた。昨日野本君が歸つて舍に手が足らなくなると、何だか今日あたり誰か來さうな氣がしてゐた。そこへひよつこり齋藤君がやつて來た。齋藤君の顏を見ると、あゝつれて來たなと思つた。久しぶりの挨拶をして、實はと話し出すのは、思つた通りそれぢや。齋藤君は『知り合の青年關藤君を信德舍へつれて參りましたから、よろしくおたのみします』といふのであつた。」

尙、をつさんはつゞけて

「何時もかうぢやが、妙なもんぢや。さうあつちからも、こつちからも來ると、こつちが困るんぢやが、さうもならないで、誰かゞ歸つて手が足らん思ひよると、きつとやつて來る。」

と話された。和尚さんのお顏には有難いことぢやと、お悅びになつてをられる心があり〳〵と讀まれる。

野本君といふのは三津ケ濱の人で奧さんと子供の三人づれで今の宿屋の家を借つて、長い間信德舍の生活をしてをられたが、今度家庭の御事情で御鄕里へお歸りになつた人です。

お寺には、かうして年中をつさんのお德を慕つてその敎を受けに來てゐる人が二人か三人切れることはない。時には四五人もゐることがある。年こつた人もくれば、若い人もくる。小學校の卒業生もあり、大學を卒業した人も來る。

をつさんは、これらの道を求める人達と一緒に、お麥の御飯をいたゞき、道を說き、本を讀まれ、又原稿をお書きになる。そして私財を以つて寺の裏に設けられた活版所で印刷をし、月刊雜誌「しんこく」を發行して、世を導いてをられる。此の頃では「しんこく」の讀者は一千名を越えてゐるが、をつさんは

決して營利を目的となさらぬ。だから毎月あの雜誌でかなり御損をなさつてゐる。けれどもをつさんがあのお麥の御飯に、質素な着物に甘んじてゐらつしやるので、雜誌「しんとく」が我が盛から、西光寺の信德舍から、毎月々々全國の讀者の下へ出て行くのである。又毎年五月には信德舍の講習會が開かれるが、その時は遠く朝鮮、京都、大阪等からわざ〳〵お話を聞きに來る人さへある。

一〇　年　頭　の　禮

廣い境内には、去年の塵一本落ちてない。はうきの跡もあざやかに靜まりかへつて、二本の門松が年の初の喜をたゝへてゐる。靜かな朝日を受けた本堂の屋根では雀が二匹樂しい元旦を語つてゐる。「今朝の一番乘は誰ならん」と、和尚さんは大玄關の眞正面に悠然と座して、村の人々が禮に來るのを待ち構へ

てゐる。

しばらくすると、村の誰彼となく、袋に入れた一升の米を片手に、せきばらひも常に變つて山門をくゞる。玄關に入ると和尚さんの前に丁寧に頭を下げ、

「明けましておめでたうございます。年内は……」とあらたまる。お和尚さんは

「おめでたう。御丁寧にごうも。さあ祝はつしやい。」

と言ふ。次の間には、何十人來ても世話のないやうにぜんざいが膳にもられて、村の人の來るのを待つてゐる。村の人は一膳づゝ食べて、あいさつして歸つて行く。

この年頭の禮は、朝の八時頃から十時頃までに行はれる。僅か二時間位の間に三百にあまる村人が來るのだから、元旦の西光寺はとても混雜する。寺では門前にある茶を製しておいて、後で村中に配る。

年頭の禮に行くのは寺だけではない。村長さんと神官さんとの宅へ金封を持つて行く。村長さんと神官さんは羽織袴で年頭を受け、人々は盃に一杯づゝ酒を受けて歸つて行く。

二日になると、和尚さん、神官さん、村長さんの三人は村中返禮に廻る。「村長さんの御年頭」と小走が先ぶれをして、其の後から正裝した村長さんが悠々と村中を廻る所なんか、とても他の村では見られない。

この外、舊の正月になると、親子及び家の禮がある。が其の一つにさへも他の村では見られない純朴さが滿ちてをり、この村の人の義理固さが現れてゐる。近來田舍のこのやうな純朴さが失はれていく傾があるが、この盛のみがもつ誠に美しい年頭の禮を我々は永く〳〵殘したいものである。

一一　學　校

行道小學校

私どもの盛には明治十一年三月初めて小學校が出來ました。行道小學校といつて今の總代場の所にありました。

校舍は昔年貢米積み入に立てられた倉庫そのまゝで、廣さ僅かに十八坪、おまけにその眞中に柱があり、運動場も二十坪ばかり、まことに不便でありました。

先生は一人、月給は村有金參百六拾圓の利子で拂ひ、その外書籍、筆、墨、紙、等の費用は生徒から出し合つたものであります。

この時分の生徒は、今も澤山ゐる筈で村長の織田さん、組合の土井さん、何

れもその一人なのであります。入學した時は八級生で、七級、六級と上つて一級でおしまひでした。

盛簡易小學校

明治二十年五月に行道小學校が、盛簡易小學校となり、翌年には四十八坪の新校舍が建築されて、教員室も別に出來て先生は二人になりました。

今總代場の側にある畠がその屋敷でありました。一學年から三學年迄あつて讀書、作文、習字、算術の四科目を習つてゐました。現在本校で、式日に校長先生が奉讀なさる教育に關する勅語は、明治二十四年一月一日この簡易小學校に御下賜になつたのであります。

盛尋常小學校

明治二十五年十月一日盛簡易小學校は、盛尋常小學校と名が變り修業年限四年となつて四學年生が出來ました。その時全校生徒六十九人、學科も修身と体操がふえました。翌明治二十六年六月一日補習科が設けられました。

この頃は、大三島にまだ高等小學校がなかつたので、尋常を卒業した者が、尚進んで學問をするには、海を渡つて忠海、或は今治へ行きました。交通不便なのと學資が多くかゝるので、一旦奮發入學した者もよく中途で退學します。そこでこれ等の人に家業を妨げず、實用上の學科を教へるためでありました。

修業年限　三箇年
教授時數　毎週十五時間
學　科　修身、讀書、作文、習子、算術
（附記　明治三十五年廢止）

盛簡易小學校新校舍建築以來十有餘年、生徒はだん／＼ふえて明治三十四年には百九十九名、先生は三名になつて教室がとてもせまくなりました。そこで又新に大幡樣の上へ敷地を求めて改築せられました。今度は百六坪の校舍で大

きな教室が三つ、運動場も三百坪ばかり。この校舍は今もそのまゝのこつて民家となつてゐます。

話に聞くとあの家はもと井口にあつた酒屋の倉を買つて來て、改造したのであつたさうです。

盛尋常高等小學校

明治三十九年五月廿八日盛口高等小學校が廢止となると共に、本校に高等科が併置されて、盛尋常高等小學校となりました。かうなると生徒はふえる、先生もふえる、翌明治四十年、今の所へ校舍二棟、百八十坪を新築。運動場六百五十坪。初めて學校内で運動會も出來る樣になりました。

當時尋常高等共に四年でありましたが、明治四十一年四月一日から義務教育六ケ年となり、尋常は六年高等二年になりました。その後二十數年帝國文化の發展と共に我が盛校も年一年進展し、學級も次第にふえ、昭和四年には八學級

となり、教室の不足を告げ、此に敷地が擴張され、新校舍が增築されました。唱歌室、理科室、裁縫室も出來、運動場は廣くなり、全く面目を改めて今日の立派な盛尋常高等小學校となりました。

一二　さかりかたぎ

「盛の人は義理がたい。」

實際さうで、二三年前までは証文なしで誰にでも平氣で大金を貸したものだ。それで借つた人はきつと返す。當り前の事であるがこれが他村では行はれないのである。又國民三大義務の内の納税を見ると命ぜられた通り一人殘らず其の日の内に納めてしまふ。

「盛の人は純朴である。」

きんしやの着物の五枚も持つて、家の中で日を送るのが娘の樣に思はれてゐる今日、くる日も毎日、質素な身なりをした姉さんかぶりの娘さん達が、野に出てゐるのはとてもうれしい。勞働は村の生命である。それを忘れて、どうして農村の女と言へよう。お祭にさへ質素な着物で平氣である。大阪伊丹へ行つてゐたものを除いては、きんしやの着物等持つてゐる者は珍しい。全く自然に頭がさがつてしまふ。

「盛の人は人の世話にならない。」

男が四十一六十一になると年賀をする。自分がしないと親類がするものだから、貧しいものでも、どうにかやらずにおかない。其の盛んな事と言つたら、ために一生の貯を費してしまふ人さへある。祝つて行く人も亦借金をしてでも澤山の品を持つて行く。わしももらつたのだから、或はいづれもらふのだから、借りのない樣にと言ふ考からであらう。出産の時も同樣の事が行はれる。又貧困

兒童に給する金でも、どんなに言つても取りに來ないので學校の方で困る始末だ。もらふのが權利の如く、圖々しく親がさいそくにさへ來る他村とは比較も出來ない。「武士は食はねどたかやうじ」多分にこの精神が殘つてゐる。こんな立派な氣質は何時までも殘しておきたい。所が、「盛り者」といふ言葉を聞くが、決して「宮浦者」と言ふ言葉を聞かない。其所に何か我々盛の人にも反省しなければならぬ所があるのではなからうか。

西光寺へは何時も色々の人が來てゐる。盛の人は「お寺の食客（ゐさふらふ）」と言ふ。どうして〳〵盛に一人もゐない樣な立派な人が來てゐる時もある。他所の人さへ見れば其の人が如何に立派な人かと言ふ事も知らずに、一樣に馬の骨の樣に言つてしまふ風がある。

農業の實習をやらすと「先生畠を分けて下さい」と言ふ。決して皆が一緒（しよ）に働かうとしない。仕方なしに分けてやると、自分のは一生懸命するがそれが終

ると遊んでゐても隣を手傳うてやらうとしない。

「盛の人は何事も盛を最上と見る。」

それは、昔ある時代に盛が大三島の中心であつた時の氣持が今もすたれないのか、他村に立派なものがあつても「うーん盛はかうだ」と言ふ調子で、決して見習はうとしない。これは一面感心すべき点でもあるが、又大缺点でもある。よい点はどし〳〵見習ふべきだ。

「盛の人には頑固な人が多い。」

村の人が病氣になると先づ祈禱をする。この頃は明神さんへは餘り行かぬ樣だが、八幡さんへは盛んに參る。言ふまでもなく神の國だからかうありたいものだが、これは醫者の居なかつた昔の習慣がさうさせたのだ。今日ではもう病と言へば醫者と藥だ。それから祈禱をしよう。

然らばこれらの長所、短所は何故生れて來たのだらう。

我が國は明治維新以來、都會も田舍も長足の進歩をした。所が全く交通路の外に安住してゐた我が盛は、この恩惠を蒙る事がすこぶる少かつた。昔盛が大三島の中心であつた當時、人々は他を見習ふ必要がなかつたであらう。その習慣が續いて今尚盛より進んだ他村を見習はうとしないから、こんなに盛獨得に出來上つたものだ。我が盛も再び交通網の中に入つた今日、このかたぎは日々に失はれていくだらうが、よく自己の長短を知つて取捨に迷はない用意が大切である。

一三　光圓和尚

光圓和尚は又大鏡禪師ともいふ。肥海の金剛寺第十世の住職であつた。

今から（昭和六年）百三十五年前（寛政八年）、周防の國玖珂郡與田村山崎幸